筑後市内遺跡群XI

福岡県筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第 85 集

2008
筑後市教育委員会

山ノ井川口遺跡第２次
（やまのいかわぐち）

山ノ井南野遺跡第６次
（やまのいみなみの）

2008
筑後市教育委員会

序

山ノ井川口・南野遺跡は当市を縦断する西海道駅路推定地に位置しております。先に行われた山ノ井川口第１次調査では道路遺構が確認され、奈良時代を中心とした遺構・遺物が確認されており、古代道路の姿が徐々に解明されつつあります。

今次の調査では山ノ井川口遺跡第２次調査で同じく道路遺構が確認され、山ノ井南野遺跡第６次からは古代の溝状遺構が確認され、奈良時代から平安時代にかけての生活の一端が垣間見えてきました。

歴史を顧み、先人たちの技術や知恵を学び得ることは、現代人である我々が現在の生活に役立てることは勿論、希望ある未来へ伝え残さなければならない責務でもあります。

本報告にあたり、地権者並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜った事を深く感謝申し上げます。

平成20年３月

筑後市教育委員会
教育長　城戸一男

例言

1. 本書は平成 18 年度に筑後市教育委員会が国庫補助事業として行った山ノ井川口遺跡第 2 次調査、平成 19 年度に行った山ノ井南野遺跡第 6 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第 I 章に記している。

3. 本書に使用した図面の遺構図は山ノ井川口遺跡を上村英士、山ノ井南野遺跡を吉村由美子が作成し、遺物の実測・浄書は（財）元興寺文化財研究所に業務委託し、監理及び管理は筑後市教育委員会が行った。

4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村・吉村が行った。

5. 今回の調査に用いた測量座標は山ノ井川口遺跡は日本測地系、山ノ井南野遺跡は世界測地系を基準としている。

6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002 に準拠している）。
SD - 溝　SK - 土壙　SP - ピット　SX - 不明遺構
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。

7. 本書の執筆は山ノ井川口遺跡を上村、山ノ井南野遺跡を吉村が行った。

目次

I . 調査経過と組織・・1

II . 位置と環境・・2

III . 調査成果
山ノ井川口２次・・・3
山ノ井南野６次・・・21

写真図版

Ⅰ．調査経過と組織

山ノ井川口遺跡第２次調査は筑後市大字山ノ井字川口に所在する。平成７年11月に開発原因者である土田喜代一氏より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地の約356㎡について本調査を実施することで合意し、国・県・市の補助事業として調査を行う事となった。

山ノ井南野遺跡第６次調査は筑後市大字山ノ井字南野に所在する。平成19年６月に開発原因者である檀菊雄氏より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地の38㎡について本調査を実施することで合意し国・県・市の補助事業として調査を行う事となった。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1）平成18年度

総括	教育長	城戸　一男
	教育部長	平野　正道
庶務	社会教育課長	田中　僚一
	文化スポーツ係長	北島　鈴美
	文化スポーツ係	永見　秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林　勇作
		上村　英士（山ノ井川口遺跡第２次本調査担当）
		阿比留士郎（～６月30日）

2）平成19年度

総括	教育長	城戸　一男
	教育部長	平野　正道
	社会教育課長	田中　僚一
	文化スポーツ係長	北島　鈴美
	文化スポーツ係	永見　秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林　勇作
		上村　英士（山ノ井川口遺跡第２次報告書担当）
		吉村由美子（山ノ井南野遺跡第６次調査・報告書担当）

3）発掘調査参加者

地元有志

4）整理作業参加者

整理作業員　野口　晴香　野間口　靖子　原　洋子

5）（財）元興寺文化財研究所

研究員　角南　聡一郎

実測・浄書　中島　朋子　仲　文恵　横井　理絵　丸山　裕見子

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

中島恒次郎、山村信榮（太宰府市教育委員会）、小鹿野亮（筑紫野市教育委員会）、小澤太郎（久留米市教育委員会）、木本雅康（長崎外国語短期大学）

Ⅱ．位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する長崎地区は市のほぼ中央に位置し、近年は国道209号に沿った形で市街化している地域である。

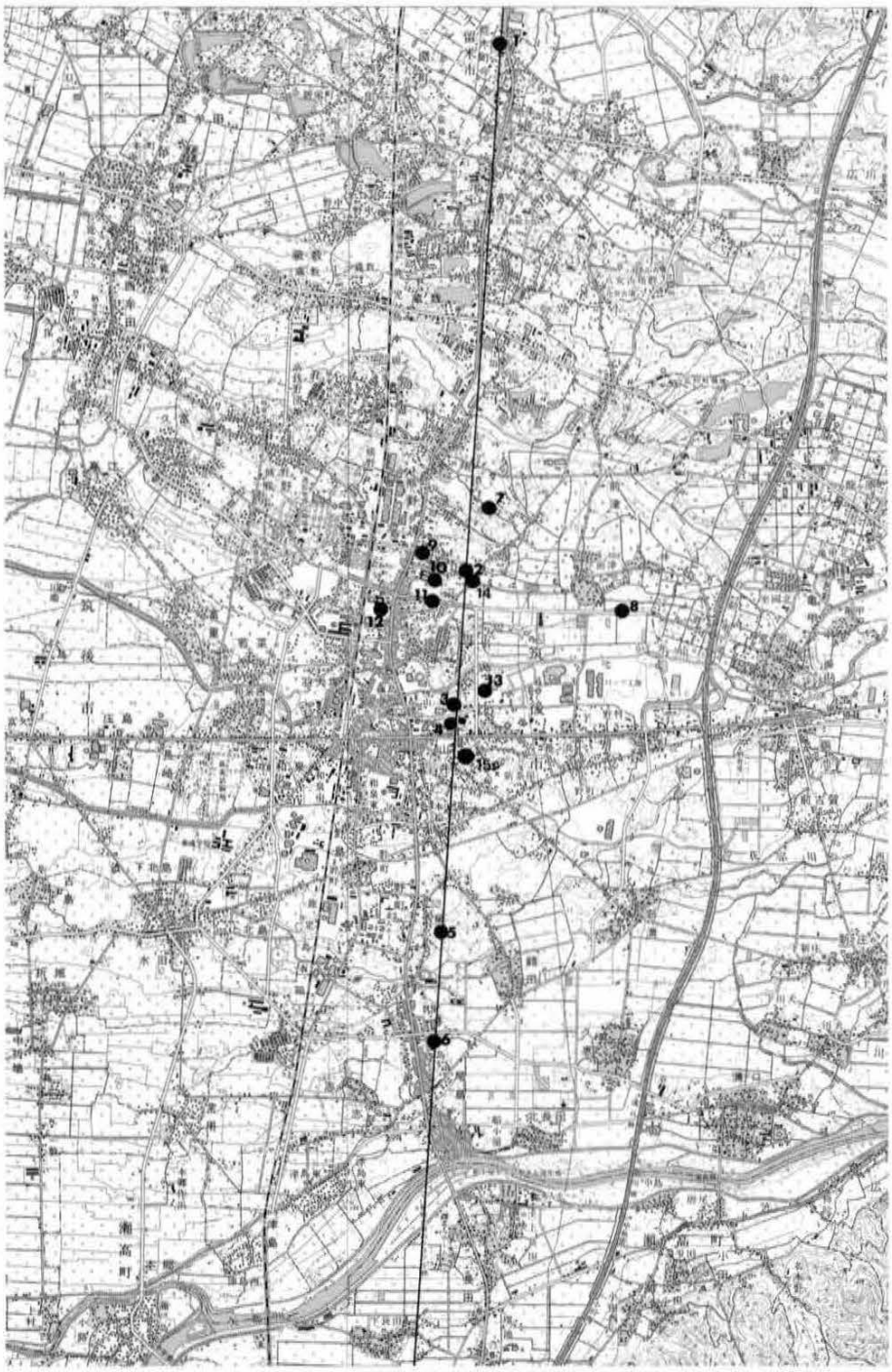


Fig.1　西海道周辺調査地点位置図（1/50000）

1. 西海道跡（第２次）
（久留米市文化財調査報告書第140集　1998）
2. 羽犬塚山ノ前遺跡（第１・２次）
（筑後市文化財調査報告書第48集　2003）
（筑後市文化財調査報告書第60集　2005）
3. 山ノ井川口遺跡（第１・２次）
（筑後市文化財調査報告書第45集　2002）
4. 山ノ井南野遺跡（第３・４次）
（筑後市文化財調査報告書第59集　2005）
5. 鶴田牛ヶ池遺跡（第２次）
鶴田木屋ノ角遺跡
（筑後市文化財調査報告書第36集　2001）
6. 鶴田中市ノ塚遺跡（第１・３・４次）
（筑後市文化財調査報告書第45集　2001）
7. 前津中ノ玉遺跡（第１・２次）
（筑後市文化財調査報告書第4集　1987）
（筑後市文化財調査報告書第22集　1999）
8. 前津柳ノ内遺跡
（筑後市文化財調査報告書第55集　2004）
9. 羽犬塚源ヶ野遺跡
（筑後市文化財調査報告書第49集　2003）
10. 羽犬塚中道遺跡（第１～５次）
（筑後市文化財調査報告書第47集　2002）
（筑後市文化財調査報告書第65集　2005）
11. 羽犬塚中道遺跡（第１～４次）
（筑後市文化財調査報告書第17集　1995）第1.2次
（筑後市文化財調査報告書第65集　2005）第3次
12. 羽犬塚寺ノ脇遺跡
（筑後市文化財調査報告書第24集　2000）
13. 徳久中牟田遺跡
（筑後市文化財調査報告書第19集　1999）
14. 前津丑ノマヤ遺跡
（筑後市文化財調査報告書第80集　2007）
15. 山ノ井南野遺跡第６次

Ⅲ．調査成果

（山ノ井川口遺跡第２次）

（1） はじめに

調査は平成 18 年 4 月 6 日から行い、平成 18 年 5 月 26 日に遺跡全体の空中写真撮影終了後に現場引渡しを行った。調査区現況は旧耕作地上に盛土を行った更地である（調査時は盛土の半分は地権者並びに工事関係者の支援により撤去済）。調査区設定は排土の都合上、反転調査を行っている。北半分の調査を 5 月 2 日まで行い、重機による反転作業を経て南半分を 5 月 9 日から 5 月 26 日まで調査を行い完了した。遺構の掘削は残存表土から遺構面までを（有）徳光建設（代表　橋爪徳光）に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

尚、調査地は平成 10 年度に行った山ノ井川口遺跡第 1 次調査（筑後市文化財調査報告書第 45 集 2002 年）地点の北隣接地である。

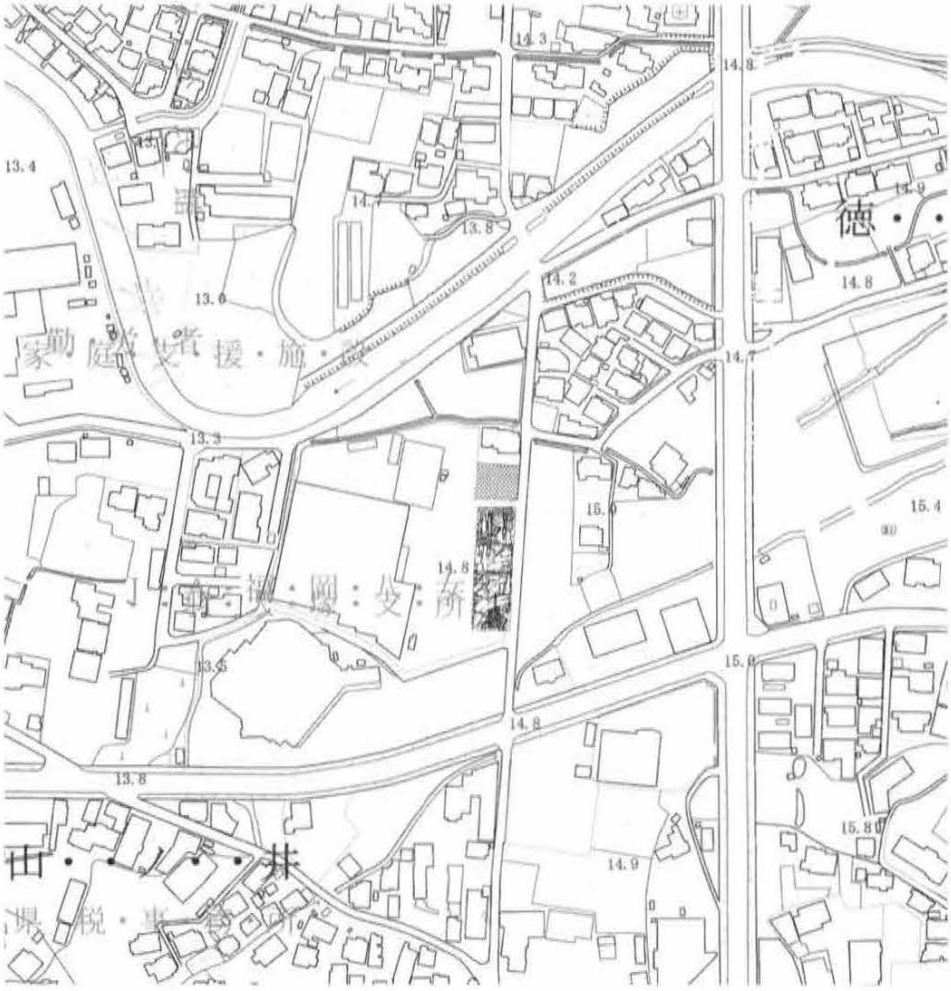


Fig.2　調査地点位置図（1/4,000）

(2) 基本土層

層位は盛土下に約25㎝の茶色土下に約60㎝の明茶黒色土(耕作土)下に約15㎝の淡茶黒色土(床土)下に約20㎝の淡黒茶色土(包含層)を検出している。遺構は溝、ピット、土壙を確認した。

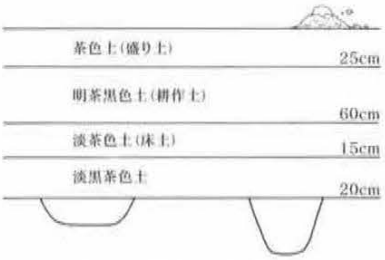


Fig.3 基本土層模式図

(3) 検出遺構

道路状遺構

SF10 (Fig.5 ～ 10、Pla.1 ～ 17)

調査区を南北に貫く道路状遺構である。推定西海道駅路ラインにほぼ合致し、西海道駅路の痕跡であると考えられる。検出された道路遺構に伴う各種パーツ(遺構)は東西両側溝、路面部に施された遺構(波板状の連続土壙、刺突状痕跡など)である。

側溝

東側溝

SD01 (Fig.5、Pla.3・4・11)

調査区東端で検出した溝である。側溝東端の立ち上がりは調査区外の現況道路下に延びるものと考えられる。検出長約13.1 m、幅約3.7 ～ 4.0 m(調査区外へ延びる)、最大深さ約0.5 mを測る。土層観察上では掘り直しなどの側溝設定が最低4回以上あると考えられる。溝底部地山は粘質土であり平坦ではない。水流による地山土の侵食や砂の堆積を確認している。側溝の設定と路面部の痕跡との先後関係は後述する。遺物は須恵器甕片、壺片、坏片、高坏片、鉢片、土師器甕片、坏×皿片、坏×椀片、高坏片、黒色土器椀B類片、黒曜石剥片が出土している。

西側溝

SD05 (Fig.6、Pla.5・9・11)

調査区西側で検出した溝状の遺構である。検出長約14.5 mを測る。側溝から東側の路面部への立ち上がりは確認できるが、西側の立ち上がりが確認できない。路面部から西側溝であろう沈み込みが、そのまま西側へ続いており、側溝の一部は中世の整地層により切られている。土層観察から側溝であろう遺構(S-14、13)を確認している。遺物は須恵器皿片、土師器甕片が出土している。

路面部

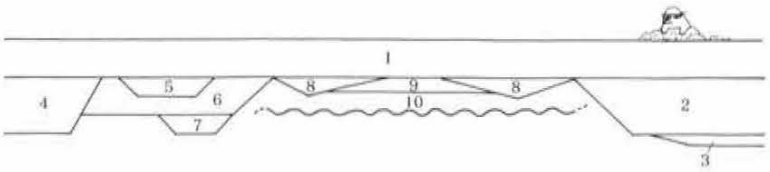
東西両側溝に挟まれた空間が路面部となる。路面幅は約7.8 m(西側溝立ち上がりから東側溝立ち上がり)を測る。路面部には様々な痕跡が残されており、調査では3段階に渡る意図的な路面構築や修復に伴う施工痕跡を確認している。最初に検出した第3段階から報告する。尚、これらの痕跡が道路使用時に通行上の痕跡であるのか、または路面を作る作業による痕跡なのかについては後述する。

第3段階(整地層S-6 ～ 9・11・12・21・22)

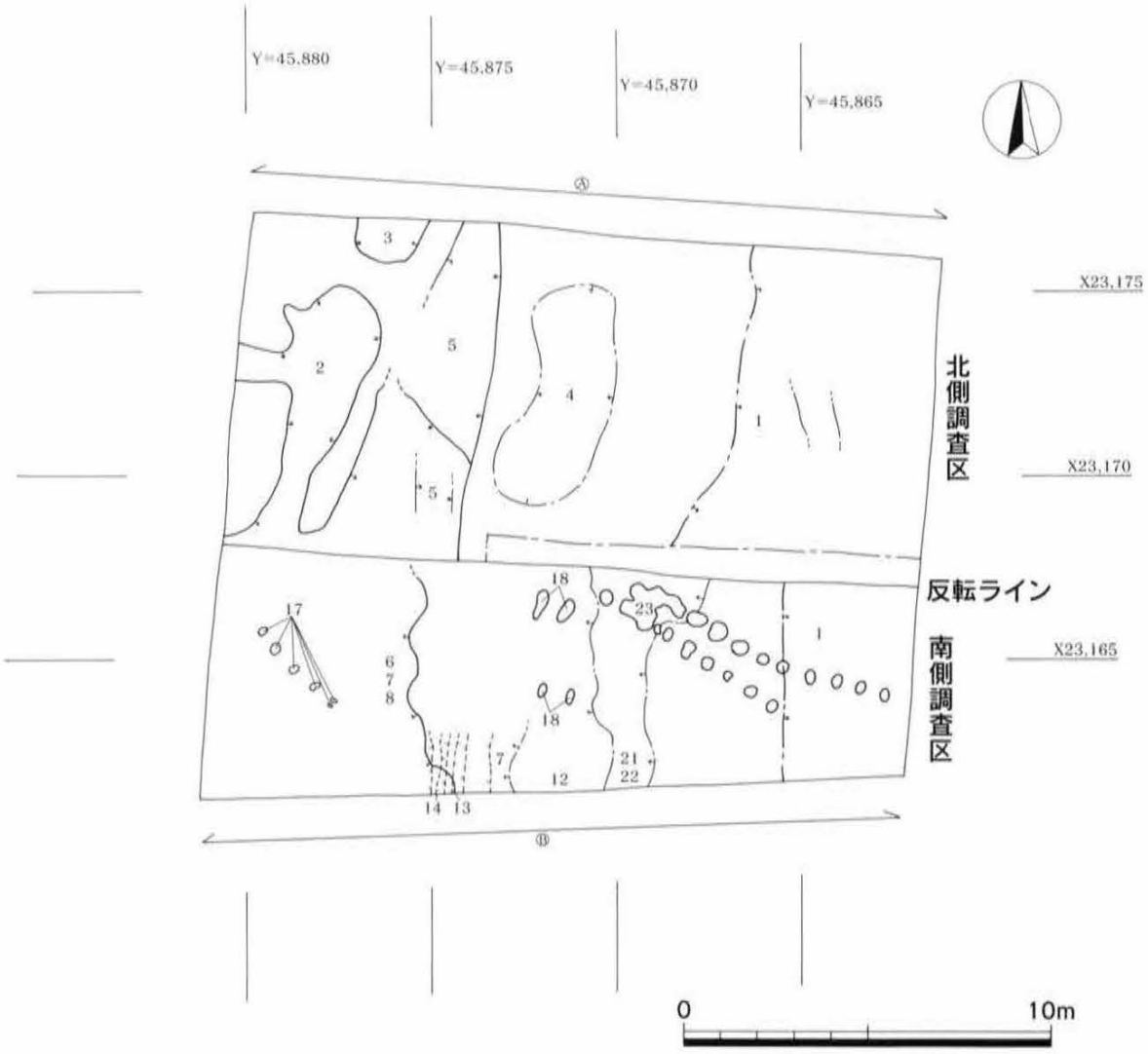
主に調査区西側で検出した整地層である(B土層模式第1・3 ～ 6層、北調査区北壁土層第6 ～ 8・12・13層、南調査区南壁土層第2・9・15・17・18層)。埋土は砂質系と粘質系の混合土である。遺構位置としては路面西側の側溝推定部以西に位置し、一部は路面部を切るように検出している。

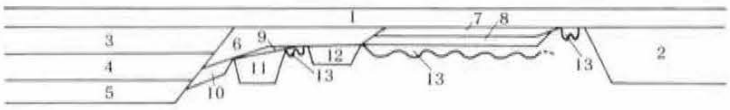
S番号	遺構番号	内容	S番号	遺構番号	内容
1	SD01	道路遺構東側溝	13		道路遺構西側溝の一部か？石混
2		溝？	14		道路遺構西側溝の一部か？石混
3		溝？	15		欠番
4		整地層(砂質系)	16		溝？淡茶黒色粘質土　埋土がマーブル状に刺突痕跡
5	SD05	道路遺構西側溝	17		連続土壙a～e
6		包含層及び整地層(中世)淡茶色土	18		連続土壙a～d
7		包含層及び整地層(中世)淡黒灰色粘質土	19		波板状の連続土壙
8		包含層及び整地層(中世)暗茶色粘質土　砂質土混	20		刺突状痕跡
9		包含層及び整地層(中世)暗灰茶色土	21		小石・小礫層
10		SD01・05を含めた道路状遺構	22		淡黄橙色砂
11		整地層(中世)茶黄砂質土	23		波板状の連続土壙
12		整地層(中世)暗灰褐色砂質土　a灰色系　b褐色系			

Tab.1 遺構番号台帳



A 土層模式　1. 淡黒茶色土（包含層）　2. 淡黒色土（S－1 東側溝）　3. 小砂礫層　4.（S－2）　5. 茶黒色土（S－5 西側溝）
6. 淡灰茶色土（S＝5 西側溝）　7.（S－5a）　8. 茶色砂（S－4）　9. 黒色粘土・小砂礫　10. 小砂礫層





B 土層模式　1.（S－6・7）　2. 淡黒色土（S－1 東側溝）　3.（S－11）　4.（S－8）　5.（S－9）　6.（S－12a・12b）
7.（S－21）　8.（S－22）　9.（S－16）　10.（S－14）　11.（S－13）　12. 波板状の連続土壙（S－19）
13. 刺突状痕跡（S－20）

Fig.4　遺構略側図（1/200）・各地点土層模式図

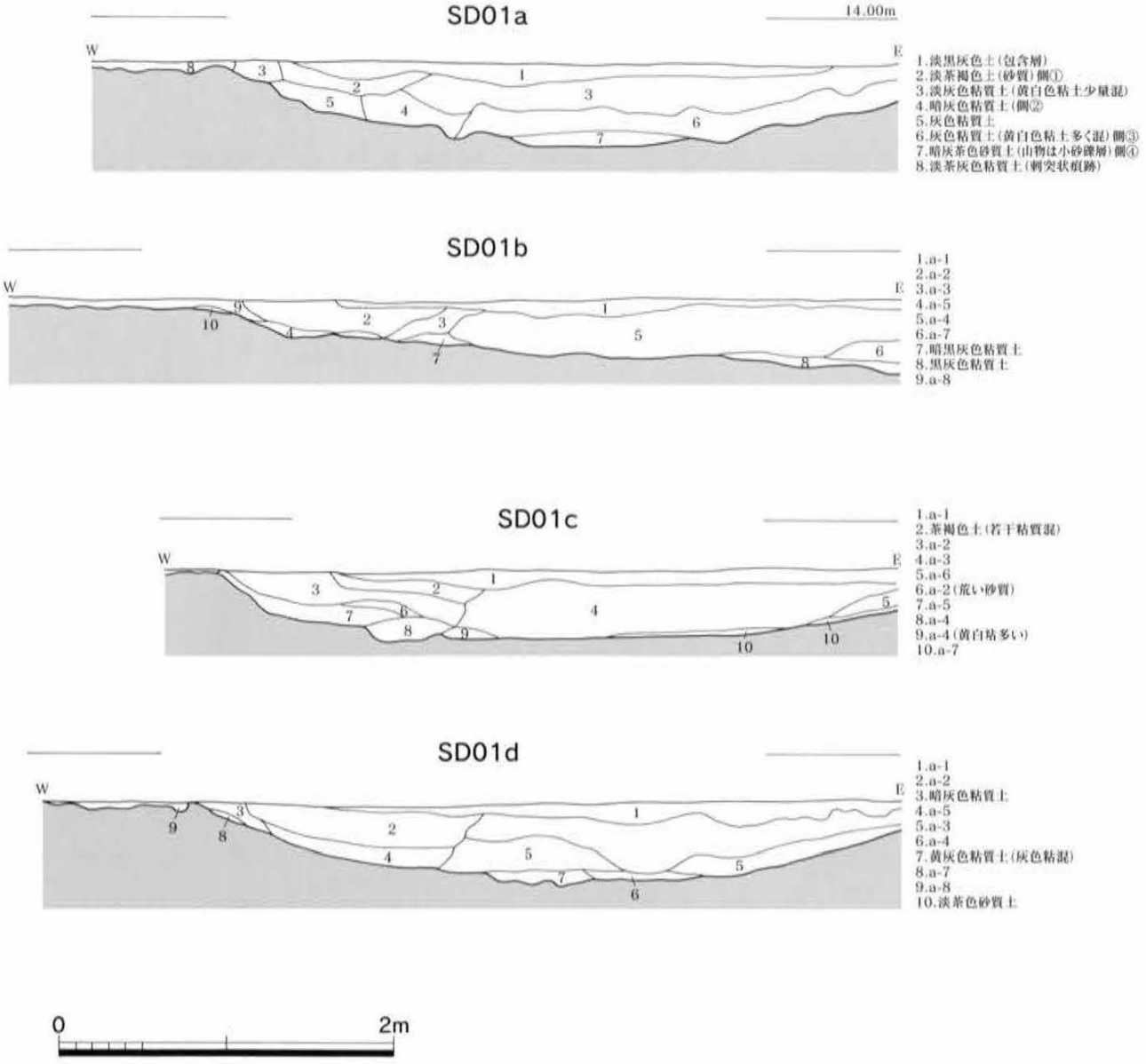


Fig.5　SD01　実測図（1/40）

第２段階（S-4・21・22）

重機で東西両側溝を確認し、その両側溝に挟まれた空間を手作業で掘り進め検出した小石・礫群である。主に北側の調査区で検出され（略図 S-4、A 土層模式第８・９層、B 土層模式第７・８層、北調査区南壁土層第９・12 ～ 15 層）、意図的に小石・礫を「撒いている」もしくは「敷いている」状態である。この小石群の覆土は A 土層模式第８層は砂質系で第９層はやや粘質土系である。小石群の単位については後述する波板状の連続土壙等の単位に沿うような形で検出している箇所もある。

第１段階（S-19・20）

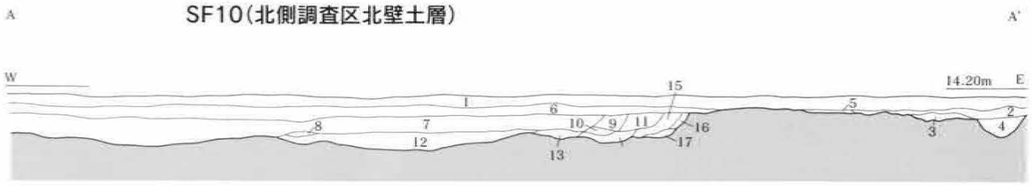
S-4・21・22 を除去した路面部の空間に存在する人為的な施工痕である。この痕跡には「波板状の連続土壙」（B 土層模式第 12 層）と「刺突状痕跡」（B 土層模式第 13 層）がある。これらの先後関係は検出面では同時に検出しており、切り合い関係が見られない。波板状の連続土壙は路面部西側寄りに配置され、それ以外の部分には刺突上痕跡が見られる。埋土は共に砂質系と粘質系の混合土であり、西側溝であろう S-14・16 覆土に近似している。

不明遺構

SX02（Fig.6）

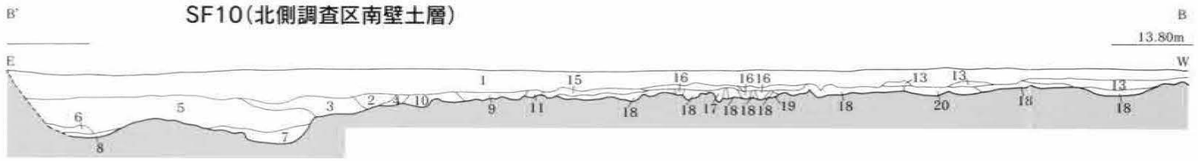
北側調査区で検出した溝状の遺構である。南側調査区では整地層を切り込む遺構である。遺構の形状が不安定で整地の一部である可能性もある。遺物は土師器甕片を出土している。

SF10（北側調査区北壁土層）

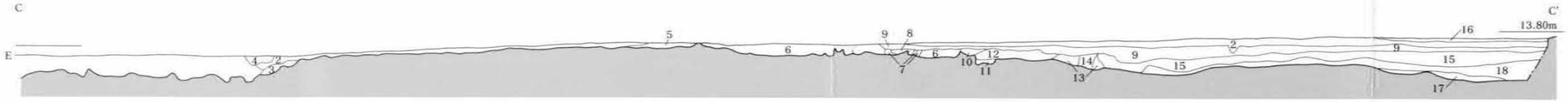


1.床土
2.淡茶黒色土（包含層）
3.暗黒色土
4.暗黒色土（黄色土多く混）
5.淡茶褐色土
6.明茶褐色土
7.暗黒色土
8.茶褐色砂質土
9.淡黒灰色土（若干砂質）
10.暗茶褐色土（若干砂質）
11.灰黒色土
12.暗黒褐色土
13.淡茶黄色土（灰色粘混）
14.淡黒色土
15.淡黒色土（茶色礫混）
16.暗黒灰色土
17.暗黒灰色土（黄色土混）

SF10（北側調査区南壁土層）

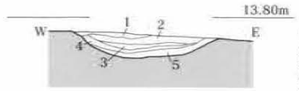


1.淡黒灰色土（包含層）
2.暗灰色粘質土
3.淡茶褐色土
4.灰色粘質土
5.淡灰色粘質土
6.暗灰色粘質土
7.灰色粘質土（黄白色粘多く混）
8.暗灰茶色砂質土
9.暗茶灰色粘質土
10.灰色粘質土（黄褐色粘混）
SD01東側溝？
11.茶灰色粘質土
12.暗褐灰色粘質土（茶色砂、黒色粒混）
13.暗灰褐色粘質土（小砂礫混）
14.黄褐色粘質土（小礫混）
15.暗灰色土（砂質、粘質混）
16.淡茶灰色砂質土
17.灰褐色土（粘質土、砂質土混）
18.淡茶色土（黄茶色砂、粘質土混）
19.淡黄灰色粘質土
20.淡茶色土（小礫、土器片多量に含む、理土が硬質）



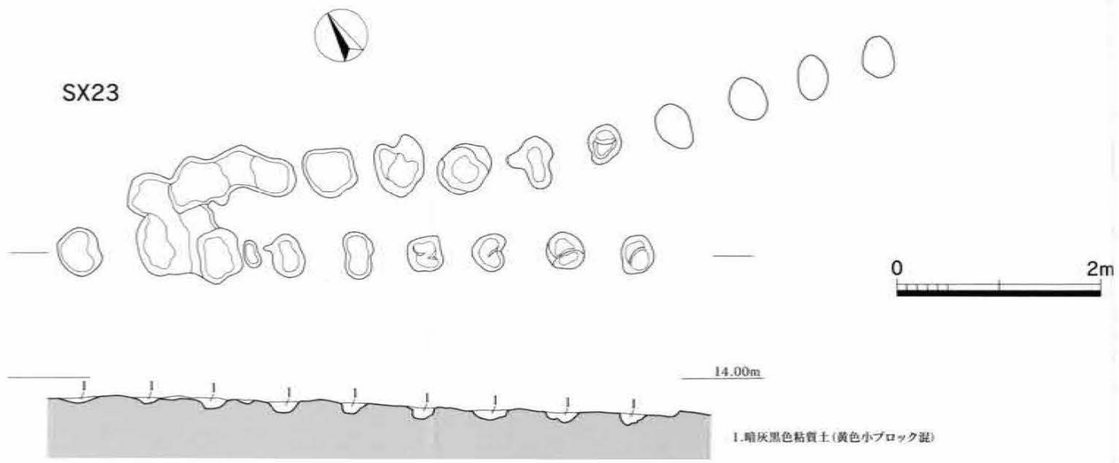
1.暗黒灰色粘
2.淡黒灰色粘
3.淡黒灰色砂（粘混）
4.赤灰黒色粘（若干砂混）
5.暗橙灰色土（砂、鉄分含）
6.灰褐色砂（S-12b）
7.灰褐色粘
8.灰色砂（荒い）
9.明灰褐砂
10.暗灰色砂（S-14？）
11.黒褐色粘（S-13）
12.暗灰色砂（細い砂のみ、S-14）
13.灰褐色粘
14.淡茶褐色粘
15.淡灰褐色土（黄色小ブロック混）
16.淡褐灰色土（床土？）
17.暗灰白色砂

SX02



1.淡茶褐色土（砂質混）
2.淡灰黒色土（砂質混）
3.淡茶黒色土（粘質土混）
4.暗茶灰色砂質土（若干粘質土混）
5.暗灰色粘質土（地山黄色土混）

SX23



1.暗灰黒色粘質土（黄色小ブロック混）

1.淡黒灰色土（包含層）
2.淡茶褐色土（砂質）側①
3.淡灰色粘質土（黄白色粘土少量混）
4.暗灰色粘質土（側②
5.灰色粘質土
6.灰色粘質土（黄白色粘土多く混）側③
7.暗灰茶色砂質土（山側より砂礫層）側④
8.淡茶灰色粘質土（刺突状痕跡）

Fig.6　道路遺構土層図、他の遺構

Fig.7　遺構全体図（1/80）

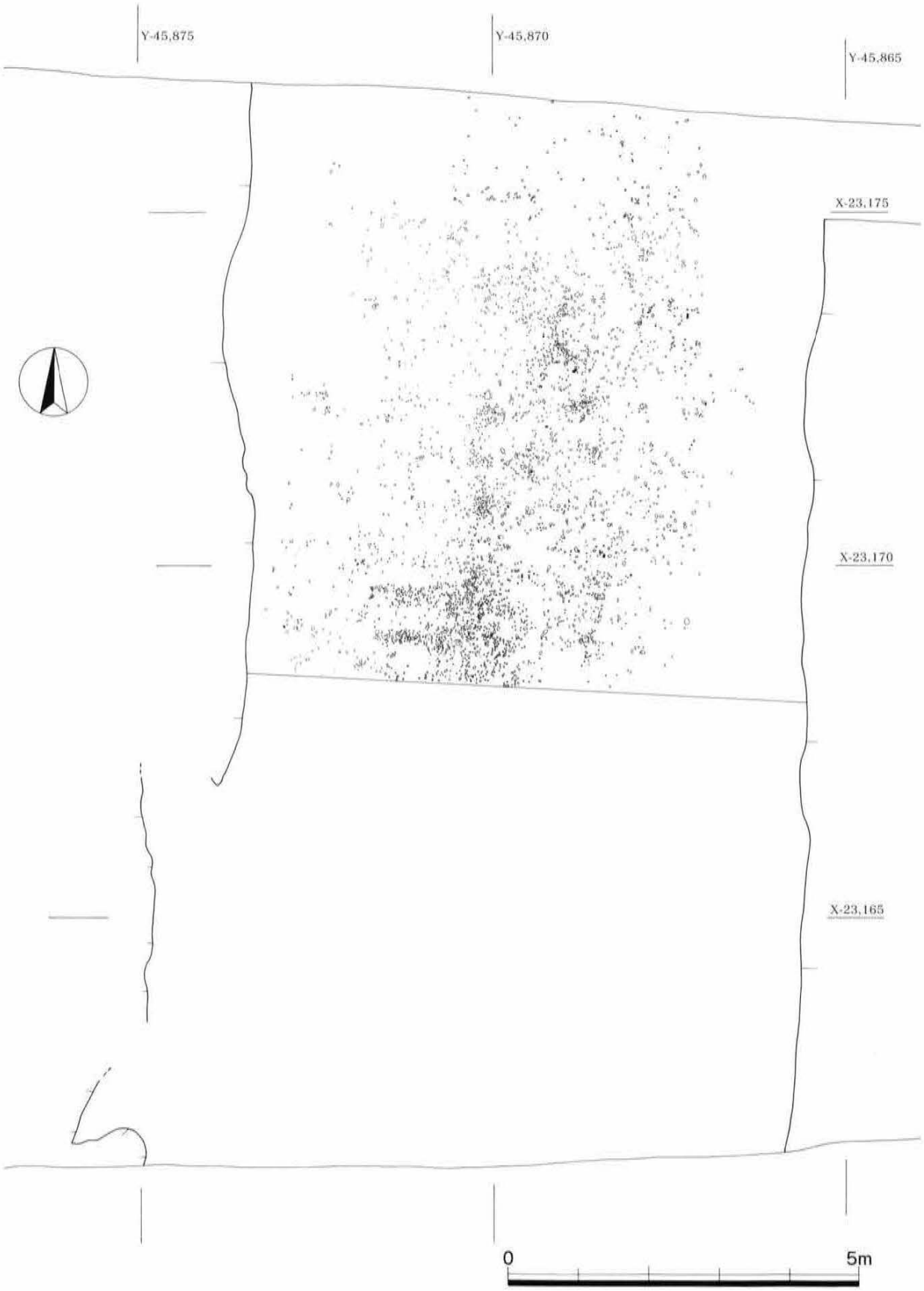


Fig.8　路面部第２段階小礫検出時（1/80）

Fig.9　路面部第２段階・第１段階（1/80）

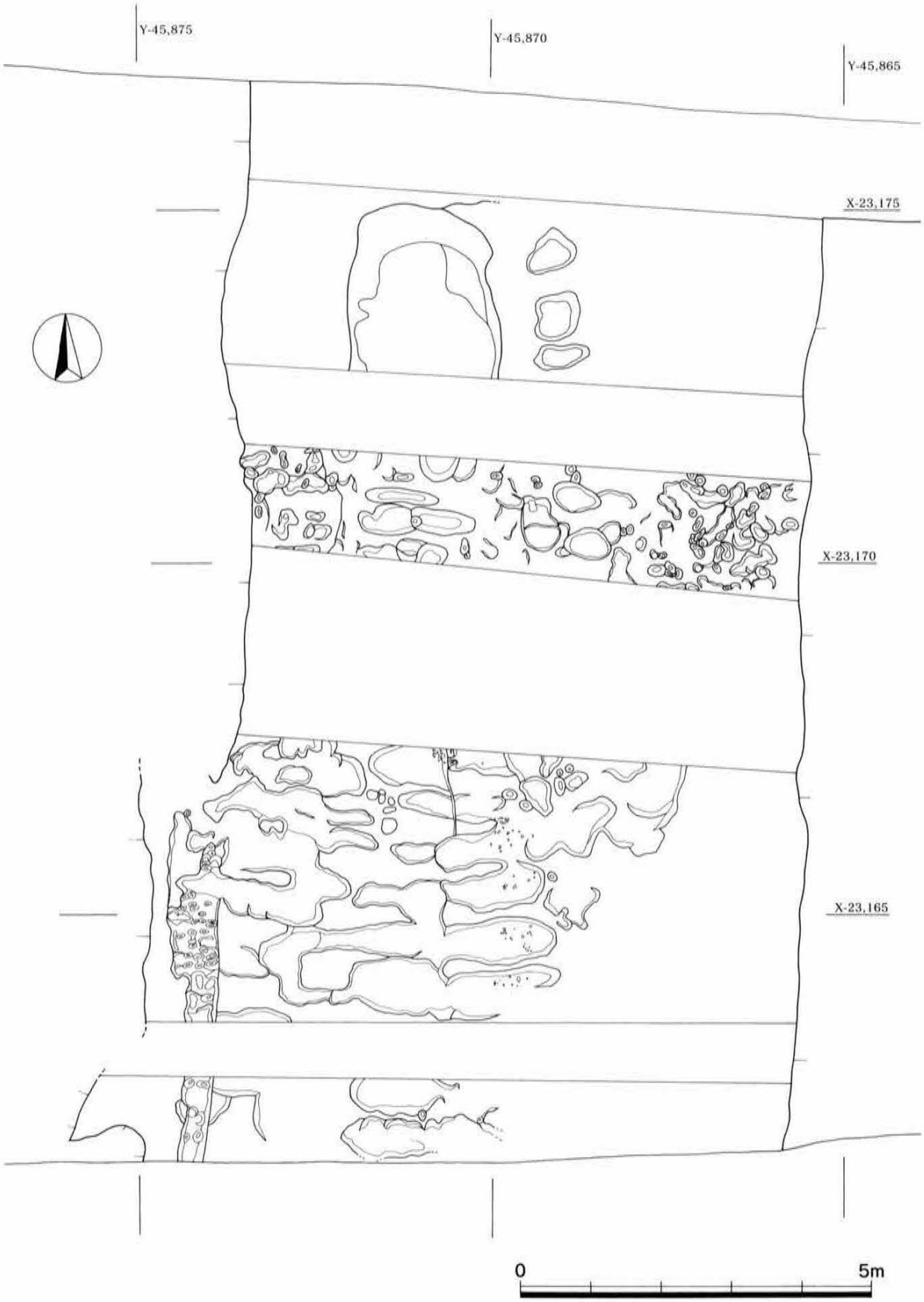


Fig.10　路面部第１段階完掘時（1/80）

SX17（Fig.4・16）

南側調査区で検出した連続土壙群である。遺構はB土層模式第4層(S-8)に切り込む。計5つのピット群をなし、北西から南東へ並ぶ。ピットは長軸で約0.35 m、短軸で約0.2～0.25 mを測る。埋土は砂質系と粘質系の灰色土である。遺物は土師器小片のみである。

SX18（Fig.4）

南側調査区で検出した連続土壙群である。遺構はSX17と同様にB土層模式第4層(S-8)に切り込む。埋土もSX17と同様であるが、遺構底部で砂質系の埋土になる。計4つのピット群をなし、北西から南東へ並ぶ。ピットは長軸で約0.3 m～0.8 m、短軸で約0.2 m～0.3 mを測る。遺物は土師器坏×皿片を出土している。

SX23（Fig.6、Pla.16・17）

南側調査区で検出した連続土壙である。道路遺構路面部から東側溝の位置に展開し、路面部ではB土層模式第7層（S-21）、東側溝埋土に切り込む。計22のピットを確認しており、北西から南東へ2列並列している。ピットは長軸で約0.4 m～0.6 m、短軸で約0.3 m～0.4 mを測る。ピットを掘り込む過程で道路遺構B土層模式第7層（S-21）の小礫を意図的に除去している。埋土は暗灰黒色粘質土と黄色ブロックである。また、東側溝上に検出されたピット埋土は側溝埋土と近似している。遺物は須恵器甕片、坏片、土師器片を出土している。

(4) 出土遺物

道路状遺構

東側溝

SD01（Fig.11、Pla.18）

須恵器

坏（1）底部片で若干歪んだ断面四角形の高台を貼り付ける。灰色を呈し、焼成還元良好。

土師器

小型丸底壺（2～4）2は口縁部から肩部片で黄茶色を呈し焼成不良。3・4は体部片で4は胎土焼成共に2と同一の可能性がある。共に磨耗が著しく調整は不明。

不明製品（5）器台のような器形を呈し、穿孔がある。焼成不良で生焼けの感がある。胎土は1㎜以下の砂粒を含む。

西側溝

SD05（Fig.11、Pla.18）

須恵器

皿（6）口径15.8㎝、器高1.7㎝、底径12.0㎝を測る。ほぼ完形で明灰色を呈し、焼成還元やや不良。底部外面は工具によるナデを施す。

土師器

坏×椀（7）直線的に立ち上がる口縁から体部片である。胎土に赤色粒子を少量含む。焼成不良。

SD13（Fig.11、Pla.18）

土師器

甕（8）口縁部小片で淡茶褐色を呈し、胎土に1㎜程度の石英、角閃石を含む。焼成不良で調整は不明。

路面部（第3段階・S-6）（Fig.11、Pla.18）

土師器

鍋（9）口縁端部片で口唇部に縄目を施す。外面は指頭痕と縦方向のハケ目が残る。白色粒子と角閃石を多く含む。

瓦器×土師器

椀（10）口縁から体部にかけてやや内湾する小片である。磨耗が著しいため調整は不明であるが、胎土はよく精選されている。

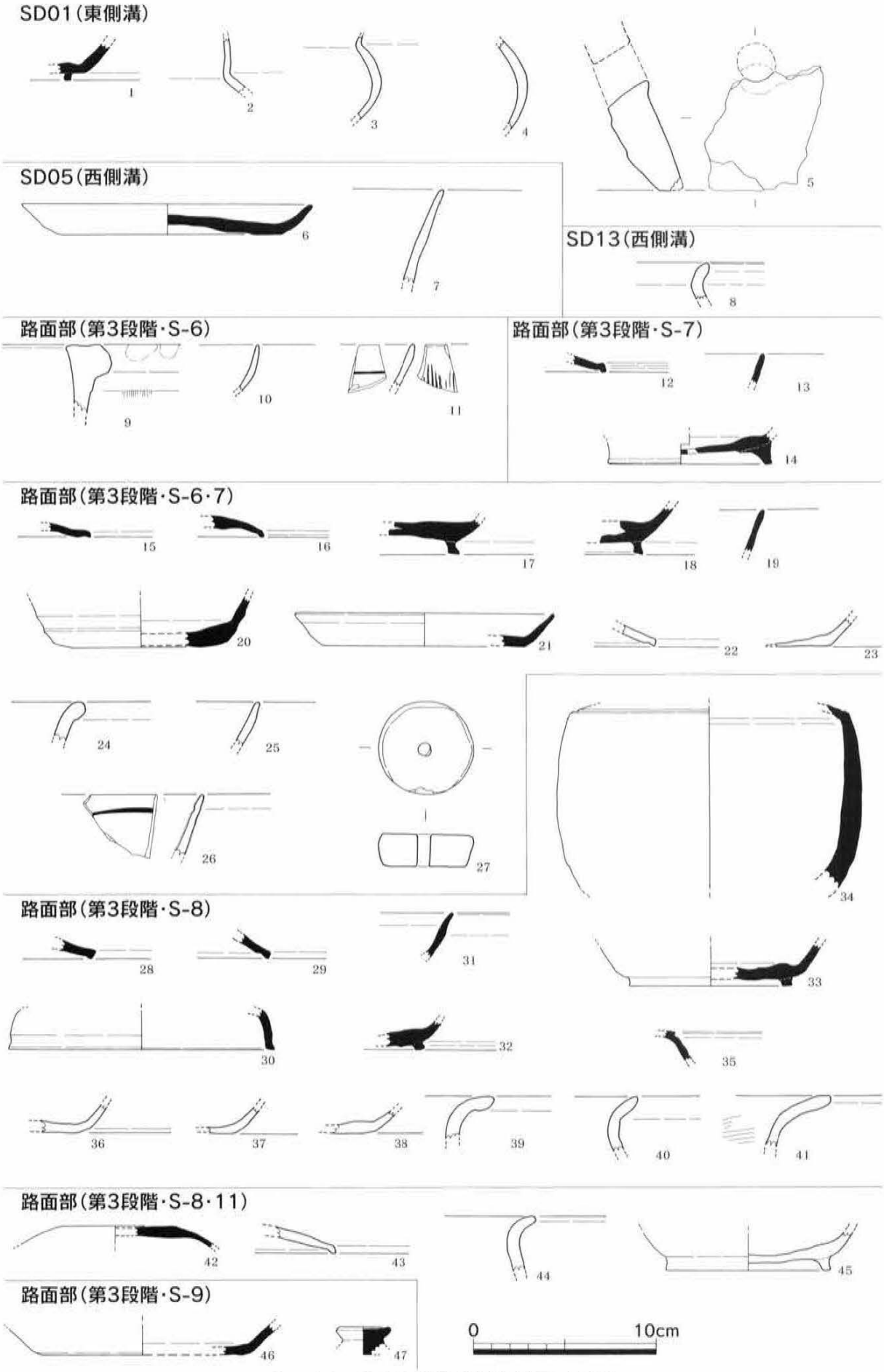


Fig. 11　SF10 道路遺構実測図（1/3）

磁器
碗（11）同安窯系青磁の口縁片である。内面に沈線、外面に櫛目を施す。
路面部（第３段階・S-7）（Fig.11、Pla.18）
須恵器
蓋（12）口縁部小片で、端部をつまみ出す。調整はヨコナデ、胎土に黒色粒子を含み、還元焼成良好。
坏（13・14）13は口縁小片で、胎土に微砂粒を含む。明青灰色を呈し、還元焼成良好。14は底部片で高台径6.0㎝を測る。断面逆台形の高台を貼り付け、底部中央に穿孔の可能性がある痕跡を残す。
路面部（第３段階・S-6・7）（Fig.11、Pla.18・19）
須恵器
蓋（15・16）15は口縁部片で端部を軽くつまみ出す。磨耗が著しく調整は不明。16は口縁部片で端部を軽くつまみ出す。
坏（17～20）17・18は底部片で、やや外に張り出す高台を貼り付ける。底部中央が共に火ぶくれを起こし破損している。19は口縁部片で胎土に白色粒子を含む。20は底径9.5㎝を測る。体部はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデ。底部は磨耗が著しく不明。
皿（21）口径14.1㎝、器高1.8㎝、底径10.8㎝を測る。体部ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ナデで調整する。暗灰色を呈し、焼成還元良好である。
土師器
蓋（22）口縁部片で端部をつまみ出す。磨耗が著しく調整は不明。
坏（23）底部片で胎土に赤色粒子、砂粒を含む。明黄茶色を呈し焼成不良である。
甕（24）口縁部片で端部を外反させる。磨耗が著しく調整は不明。
瓦器
椀（25）口縁部片でやや内湾気味に立ち上がる。口唇部から外面にかけて黒色化している。
磁器
碗（26）竜泉窯系青磁片である。内面に粗い沈線を施す。内外面に貫入が見られ、釉は透明度・光沢度が高い。
土製品
紡錘車（27）直径5.2～5.05㎝、厚さ1.8㎝、重さ52.2ｇ、中央の穿孔部分径0.6㎝を測る。
路面部（第３段階・S-8）（Fig.11、Pla.19・20）
須恵器
蓋（28～30）28･29は口縁部片で端部をつまみ出す。調整はヨコナデ。29は胎土に黒色粒子を含む。30は口径14.4㎝を測る。調整はヨコナデ、口縁端部を若干つまみ出す。焼成還元良好。
坏（31～33）31は口縁部片で内湾気味に立ち上がり口縁部でやや外反する。調整はヨコナデ、内面に有機物であろう付着が見られる。32は底部片で断面四角形の高台が張り付く。33は高台径9.0㎝を測り断面四角形に近い高台が張り付く。胎土に黒色粒子を多く含む。
壷（34）長頸壷の肩部から胴部片にかけての片である。肩部に沈線を施し、内面は同心円の当て具痕の上からナデを施す。外面は肩部から胴部中央に自然釉がかかり調整はヨコナデ、胴部下半はヘラケズリを施す。
不明製品（35）蓋の形状に近似しており、つくりが薄い。調整はヨコナデ、外面は暗茶灰色、内面は明茶灰色を呈する。焼成還元良好。
土師器
坏（36～38）全て底部片で磨耗が著しく調整は不明であるが、38のみ底部ヘラ切りか。
甕（39～41）全て口縁部片である。38は外面ヨコナデ、41の内面は横方向のハケメが見られるが、他は磨耗が著しく調整は不明である。
路面部（第３段階・S-8・11）（Fig.11、Pla.20）
須恵器

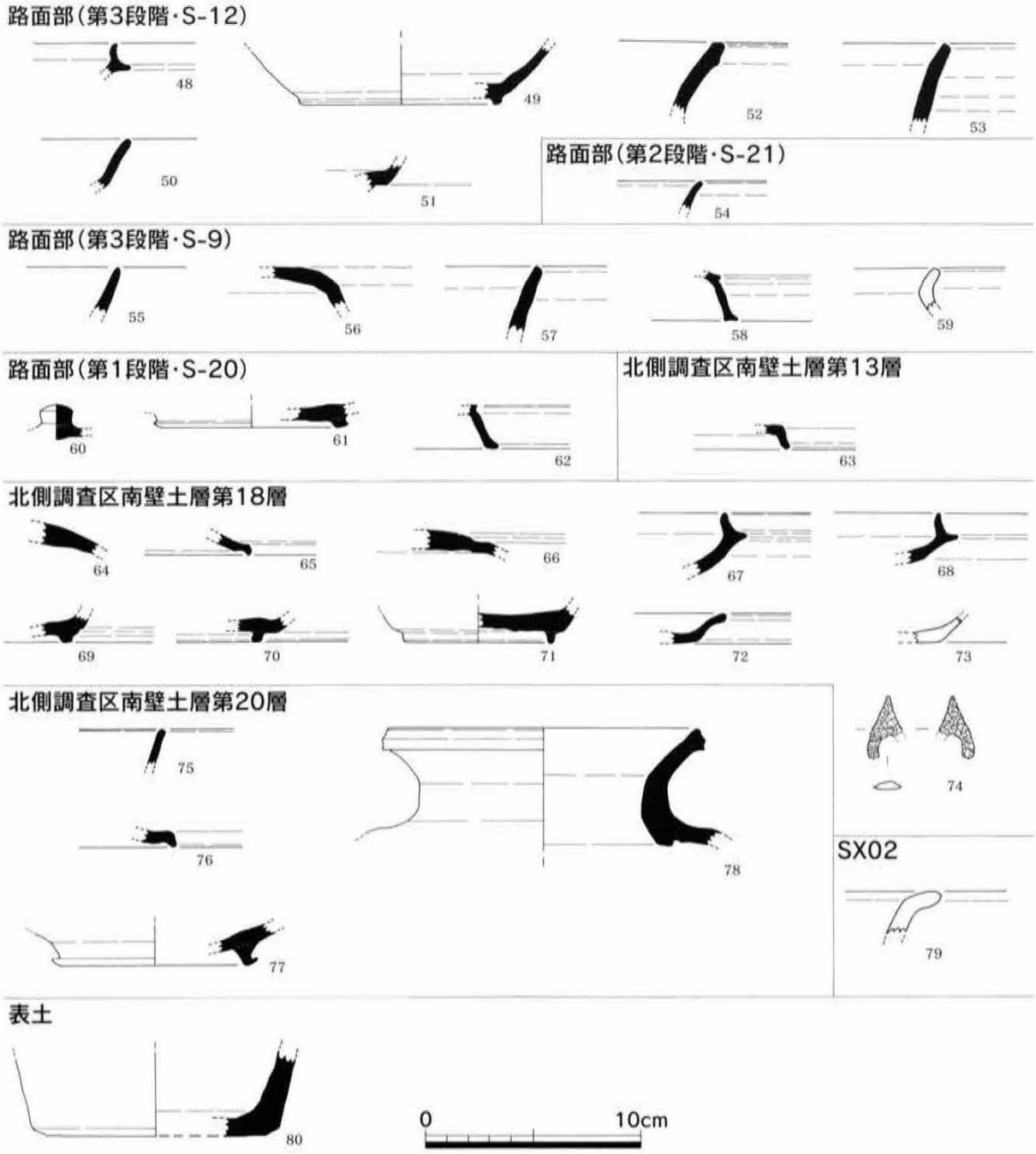


Fig. 12　SF10 道路遺構、その他の遺構遺物実測図（1/3）

蓋（42）天井部片で外面を回転ヘラケズリ、内面をヨコナデ調整する。暗灰色を呈し焼成還元良好。

土師器

蓋（43）口縁部片で端部をつまみ出す。磨耗が著しく調整は不明。

甕（44）口縁部が緩やかに外反する甕片で、黄茶色～黒褐色を呈する。磨耗が著しく調整は不明。

瓦器×土師器

椀（45）高台径 9.0 cmを測る。断面逆台形の高台が張り付く。磨耗が著しく調整は不明である。外面は明黄灰色、内面は明白灰色を呈し、胎土は精選されている。

路面部（第３段階・S-9）（Fig.11）

須恵器

坏（46）底部片で底径 5.85 cmを測る。底部外面は不定方向のナデで調整する。焼成還元良好。

蓋（47）摘み部分の小片である。摘み径 3.0 cmを測る。淡灰黄色を呈し、焼成還元不良。

路面部（第３段階・S- １２）（Fig.12、Pla.20・21）

須恵器

坏（48 ～ 51）48 はかえりの付いた坏身である。調整はヨコナデ、淡茶灰色を呈し焼成還元良好。49 は高台径 9.4 cmを測る。高台接地部分の角を面取りした高台が張り付く。調整はヨコナデ。淡茶灰色で

焼成還元良好。50 は体部片で底部の稜から屈曲しやや外反する。調整はヨコナデ。51 は底部片で高台が屈曲部より内側に取り付く。調整はヨコナデ。

甕（52）やや外反する口縁部片である。調整はヨコナデ。淡茶灰色を呈し焼成還元良好。

壷（53）口縁部小片で外面はナデ、内面下半はナデ調整。淡茶灰色を呈し焼成還元良好。

路面部（第 2 段階・S-21）（Fig.12、Pla.21）

須恵器

坏（54）口縁部小片で調整はヨコナデ。外面暗茶灰色、内面淡茶灰色を呈する。焼成還元良好。

路面部（第 1 段階・S-19）（Fig.12、Pla.21）

須恵器

坏（55）口縁部片で調整はヨコナデ。淡茶灰色を呈し、焼成還元良好。

壷（56・57）56 は肩部片で調整はヨコナデ。57 は口縁部片で調整はヨコナデ。共に淡茶灰色を呈し焼成還元良好。

不明製品（58）蓋の形状に近似し、端部をつまみ出している。明灰色を呈し、還元やや不良である。

土師器

甕（59）口縁部片で磨耗が著しく調整は不明。胎土に角閃石を含む。

路面部（第 1 段階・S-20）（Fig.12、Pla.21）

須恵器

蓋（60）摘み径 1.5 ㎝を測る。調整はナデとヨコナデ。淡灰茶色を呈し、焼成良好、還元不良である。

坏（61）高台径 9.0 ㎝を測る。歪んだ断面四角形の高台を貼り付ける。淡茶灰色を呈する。

不明製品（62）蓋の形状に近似し端部をつまみ出す。調整はヨコナデ。

北側調査区南壁土層第 13 層（Fig.12、Pla.21）

須恵器

蓋（63）口縁から天井部にかけての小片で調整はナデ、ヨコナデである。淡茶灰色を呈する。

北側調査区南壁土層第 18 層（Fig.12、Pla.21・22）

須恵器

蓋（64 ～ 66）64 は天井部片で外面は回転ヘラケズリ後ナデ、内面はヨコナデ、65 は端部片で調整はヨコナデ、66 は天井部片で外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデ。

坏（67 ～ 71）67 はかえりを持つ坏身片で底部外面をヘラケズリ、他はヨコナデ、68 は調整はヨコナデ、69 は断面逆台形の高台を貼り付ける。70 は断面四角形の高台を貼り付ける。71 は高台径 7.0 ㎝を測る。

皿（72）口縁部をやや外反させ、体部内外面をヨコナデ底部内外面をナデ調整する。

土師器坏×皿（73）底部片で磨耗が著しいため調整は不明。

石製品

石鏃（74）黒曜石製の鏃である。脚部が一部欠損する。長さ 2.9 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る。

北側調査区南壁土層第 20 層（Fig.12、Pla.22）

須恵器

坏（75）口縁部片で端部にやや丸みを見られる。調整はヨコナデ。

蓋（76）端部片である。端部を屈曲させ、つまみ出している。調整はヨコナデ。

坏（77）高台径 9.5 ㎝を測る。高台の端部が外面につまみ出され跳ね上がっている。

甕（78）口径 14.2 ㎝を測る。頸部から肩部内面に当て具痕が残る。外面は自然釉がかかる。

SX02（Fig.12、Pla.22）

土師器

甕（79）口縁部片で端部を屈曲させ口唇部に面を持たせる。胎土に角閃石、小砂粒を含む。

表土（Fig.12、Pla.22）

須恵器

壷（80）内面は工具によるナデ、外面底部と胴部との屈曲部にケズリ痕、底部外面はナデ調整である。

(5) 小結

・検出された道路遺構の概観

今次調査地点は歴史地理学で想定されている推定西海道駅路上であり、試掘・確認調査の段階で道路遺構が確認され、本調査に至っている。本調査は狭い面積ではあるが側溝と路面部分を確認し、各種の道路造成に係る痕跡が残されていることが解った。

調査からは３段階による施工痕跡が確認できる。各段階の特徴をあげると次のようになる。

第３段階　道路西側溝埋没過程による整地および路面部までパックするような中世の整地層である。この時期に道路としての機能が存在していているとは想定できない。しかし、山ノ井南野遺跡第３・４次調査東側溝のような、13 世紀まで土地区画や溝として機能していた事例があるため、今後、西側溝埋没時期を精査することが必要である。

第２段階　東西両側溝に挟まれた空間に意図的に小礫・礫を敷いた面である。明らかに道路造成に伴う面であり、軟弱地盤に対しての施工痕跡と考えられる。全体的に見ると単位で捉えられそうな部分が存在し、後の波板状の連続土壙の単位と重なる部分もあり、第２段階としてのみの扱いが適当であるかは疑問として残る。

第１段階　黄茶色の地山に穿たれた路面造成期の最初の施工痕跡であると考えられる。第２段階の小礫層を除去した時点で波板状の連続土壙と刺突上痕跡が見られ、埋土は砂質と粘質の混合土である。また、路面部の空間の中でも特に西側溝に近い部分で顕著に見られることは、元来から軟弱地盤である当調査地で路面中央から西側地域が最も地盤が脆弱であった様子をうかがわせる。

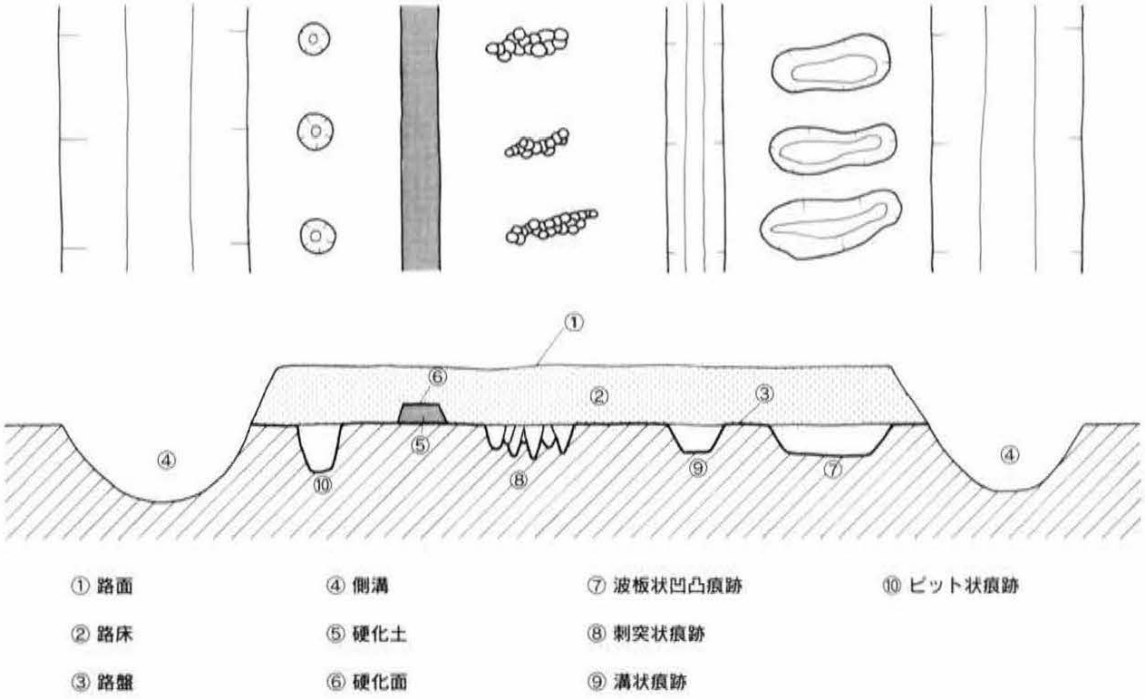


Fig.13　道路状遺構名称模式図（『筑後市内遺跡群Ⅳ　第 45 集より抜粋）

・道路施工痕跡の比較

調査地南側は平成 10 年に山ノ井川口遺跡第１次調査が行われており（『筑後市内遺跡群Ⅳ』筑後市文化財調査報告書第 45 集）、報告の中で各種道路遺構痕跡について論じており、その成果に沿って今次調査の成果と比較してみる。

①路面　路面使用時の面としては各段階とも想定しがたい。使用面と断定できる定義として「人および車などの通行痕跡」が挙げられるが、歩行痕跡や轍などを検出するには至っていない。第１段階の痕跡の埋土直上、もしくは第２段階の検出面である小礫群の直上として想定することが可能である。

②路床　路盤と考えられる部分の直上を指しており、第２段階の検出面直上であったと考えられる。
③路盤　第２段階の小礫群を想定する。人為的・意図的に路面に対して施工しており、軟弱地盤であるが故に施工された痕跡と考えられる。当市の西海道調査事例の中でも異例であり、筑後国府周辺の道路遺構に見られる礫敷きに共通する痕跡のようである。
④側溝　山ノ井川口遺跡第１次調査と同様で東側溝は溝として把握できるが、問題は西側溝である。調査地から南に約 150 mの地点で山ノ井南野遺跡第３・４次調査が行われており、幅約 1.6 m程の側溝を検出している。今次調査地点は S-13・14 という非常に小規模な溝を確認するに留まっており、中世の整地による造成により削平を受けたものと考えられる。
⑤硬化土　第１段階の刺突上痕跡と波板状の連続土壙の覆土は側溝覆土の硬さに比べると非常に締まっているという印象を受けた。また、第２段階の小礫群を除去する過程も石を締め込むといった感があった。したがって、第２段階および第１段階の覆土は共に他の遺構の埋土より強固であり、軟弱地盤の造成に必要な措置であったと考えられる。
⑥硬化面　第１段階の波板状の連続土壙および刺突上痕跡の確認面である。
⑦波板状凹凸痕跡　第１段階の波板状の連続土壙である。今次調査の道路遺構で検出された連続土壙は列として整然と並ぶような痕跡ではなく、不定形な窪みが不規則に（一部は並ぶ箇所もある）配置されているようである。埋土は第２段階の小礫が詰め込まれている部分もあり、第１段階から第２段階への施工の継続性がうかがわれる。
⑧刺突上痕跡　検出面ではピット状に形成され、砂質土と粘質土の混合土がマーブル状に検出された部分もある。突き固めたによる作用でこのような痕跡が形成されるのかは慎重に検討しなければならない。

今次調査では第１次調査に沿った形で遺構を検出し、西海道駅路であろう痕跡を確認した。当市は南北に 9km、東西に 7km が市域であり、この南北９km を貫くかたちで西海道駅路が造られたことは発掘調査から明らかになっている。当市の調査事例からは様々な道路痕跡が確認されているが、各調査地点において道路施工痕跡に違いが見られ、一直線に貫かれた道路を造成するにあたって立地環境に適した施工を行っていることが解っている。しかし、各調査地点に見られる道路施工痕跡の施工時期や施工技術の復元には今だ至っておらず、今後の調査の積み重ねを期待したい。

参考文献

『筑後市内遺跡群Ⅳ』筑後市文化財調査報告書第 45 集　筑後市教育委員会　2002
『山ノ井南野遺跡Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第 59 集　筑後市教育委員会　2005
小林勇作『福岡県筑後市周辺の遺跡 - 駅路と伝路、その構造の違い -』「考古学ジャーナル」566 号　2007

2．山ノ井南野遺跡　第６次調査

（1）はじめに

当遺跡は、筑後市大字山ノ井字南野に所在する。標高 13 m程度の低地に立地し、周辺では、中世の溝などが確認された徳久中牟田遺跡、同じく中世の溝や古代官道跡などが確認された山ノ井川口遺跡などが知られている。今次調査地点は、同年に調査が行われた山ノ井南野遺跡第５次調査地点の南側に位置する。平成 19 年６月に開発原因者である檀菊雄氏より当該地 343.58 ㎡について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され，試掘調査の結果遺跡が確認されたため、建造物が遺構に影響を及ぼす可能性がある約 38 ㎡について本調査を実施することで合意した。本調査は吉村が担当し、平成 19 年６月 18 日より表土除去を（有）フクシマ重機に委託して開始し、同年７月 21 日に現地の埋め戻しをもって調査を終了した。

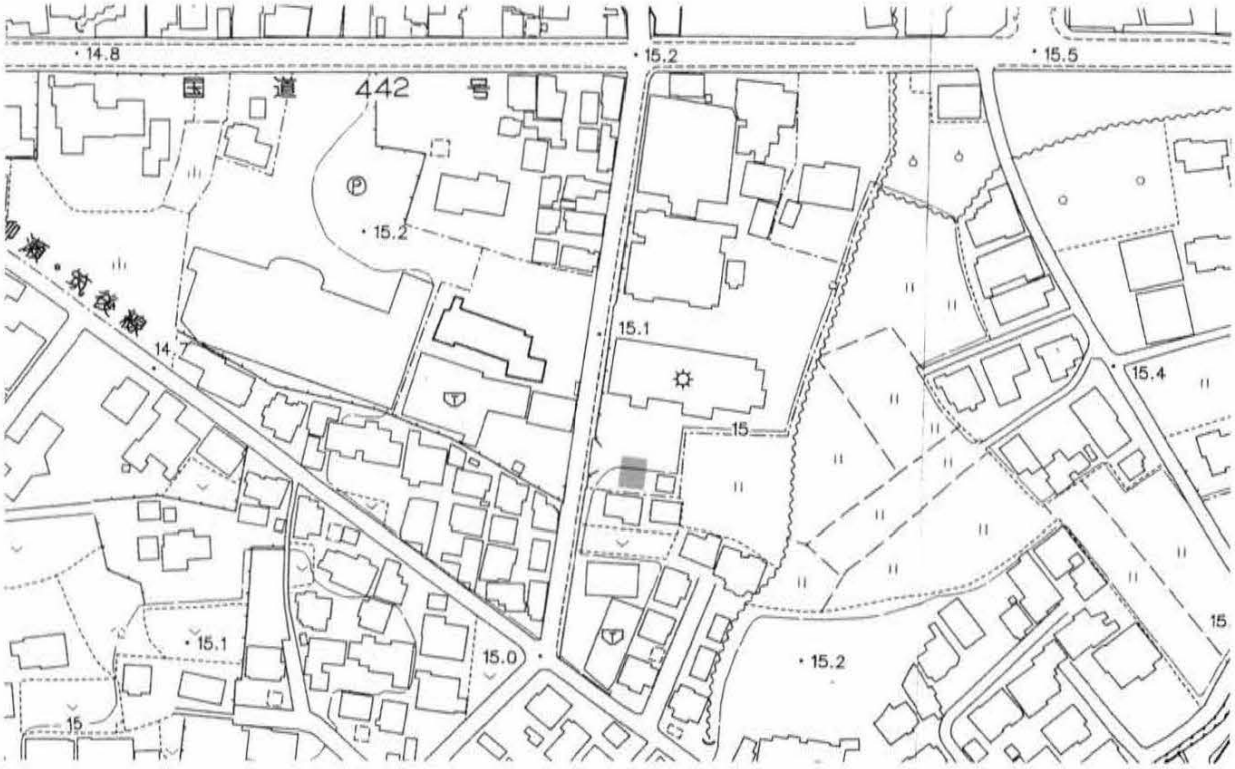


Fig.14　調査地点位置図（1/2500）

（2）検出遺構

溝

6SD1　(Fig.15、Pla.23・24)

調査区東部で検出された南北方向の溝である。溝の規模は検出された範囲で上面幅 3.3 m（調査区外へ拡がる）、深さ 0.6 mを測る。埋土によって大きく３層に分層される。最下層では幅 0.2 m程の細い流路が２条走り、東側のものは弧を描きながら北と東へ、西側のものは南北へ延びていく様相を呈する。第５次調査において検出された 5SD30 の延長部にあたると考えられる。

土坑

6SK2

調査区中央部において、6SD1 に切られる形で検出された。確認できる範囲での上面最大幅は 1.6 m、深さは 0.3 mを測る。この土坑からの遺物の出土はなかった。

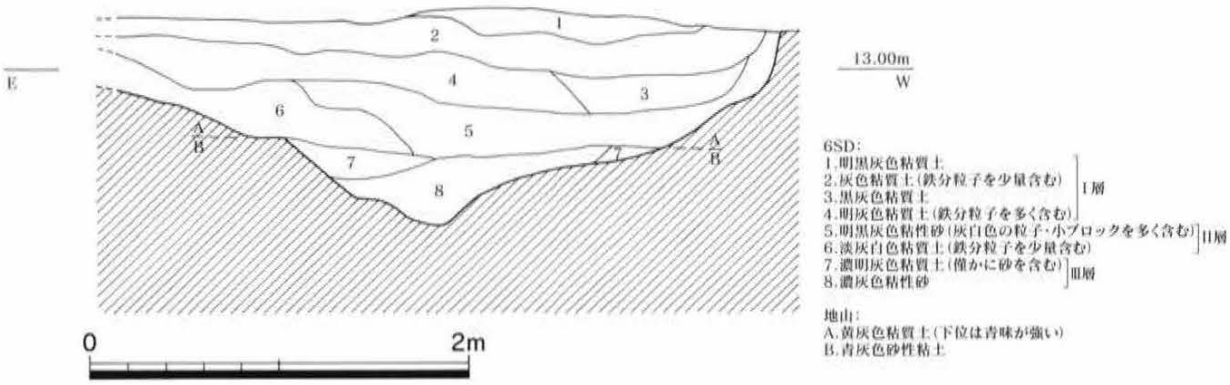


Fig.15　6SD1 南壁土層図

（3）出土遺物

須恵器（Fig.16 、Pla.24）

ほぼ完形の鉢である。6SD1 第Ⅰ層から出土した。土圧によって上部は大きく歪んでおり、法量は口径 16.2 ～ 19.1 ㎝、底径 12.6 ㎝、器高 8.7 ㎝を測る。口縁は僅かに内湾する。体部下半は回転ヘラ削り、上半は横ナデによる調整を施す。底部は回転ヘラ切による切り離しの後、不定方向のナデ調整を施す。内面の色調は淡黄茶色、外面は淡黄灰褐色を呈する。

今次調査において、遺構からの出土遺物はこの 1 点のみであった。

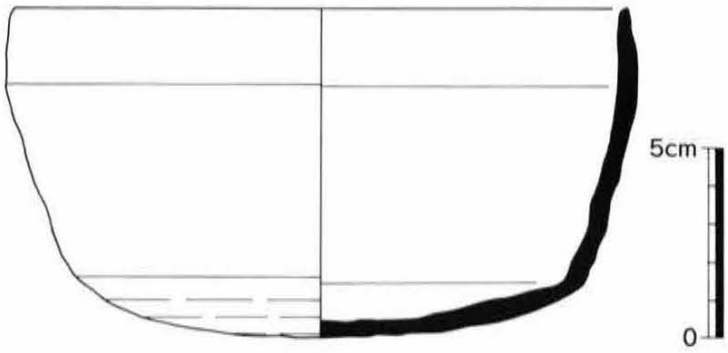


Fig.16　出土遺物実測図（1/2）

（4）小結

今回の調査では、6SD1 が調査区の約半分を占めていた。この溝は、北側で行われた山ノ井南野遺跡第 5 次調査において検出された 5SD30 と同一の溝であると思われる。検出状況から、自然流路を利用した可能性が考えられる。遺物が乏しいため、詳細な検討は困難であるが、Ⅰ層から出土した須恵器鉢は 8 世紀後半の所産と考えられるため、最終埋没時期は奈良時代末～平安時代以降と想定される。その他の遺構については、遺物が皆無であるため、時期などの詳細は不明である。

周辺の調査結果などから、今回調査地点を含む一帯には大小の流路が走り、それらを拡幅するなどして利用されていた状況が窺える。今回検出された溝もその一例であろう。

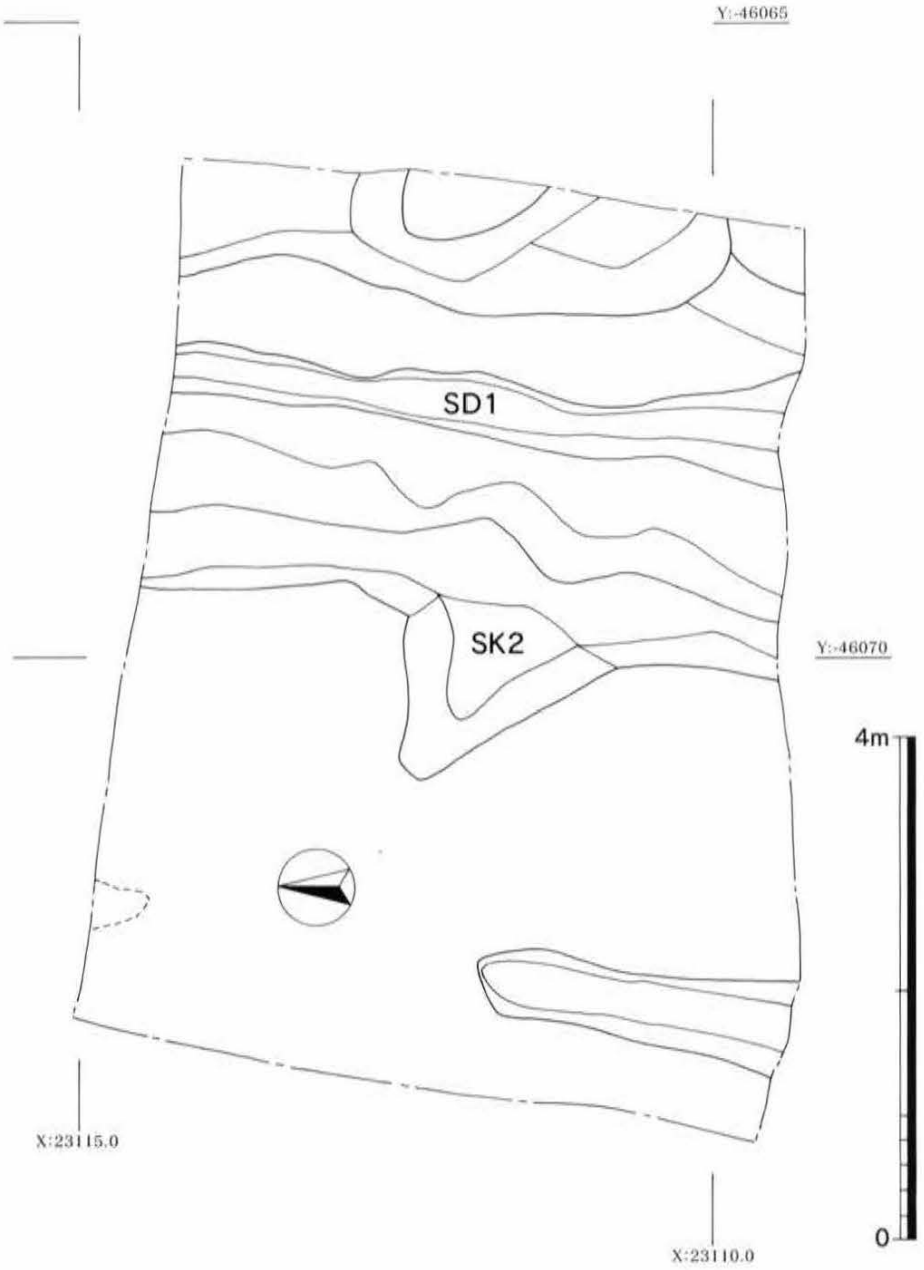
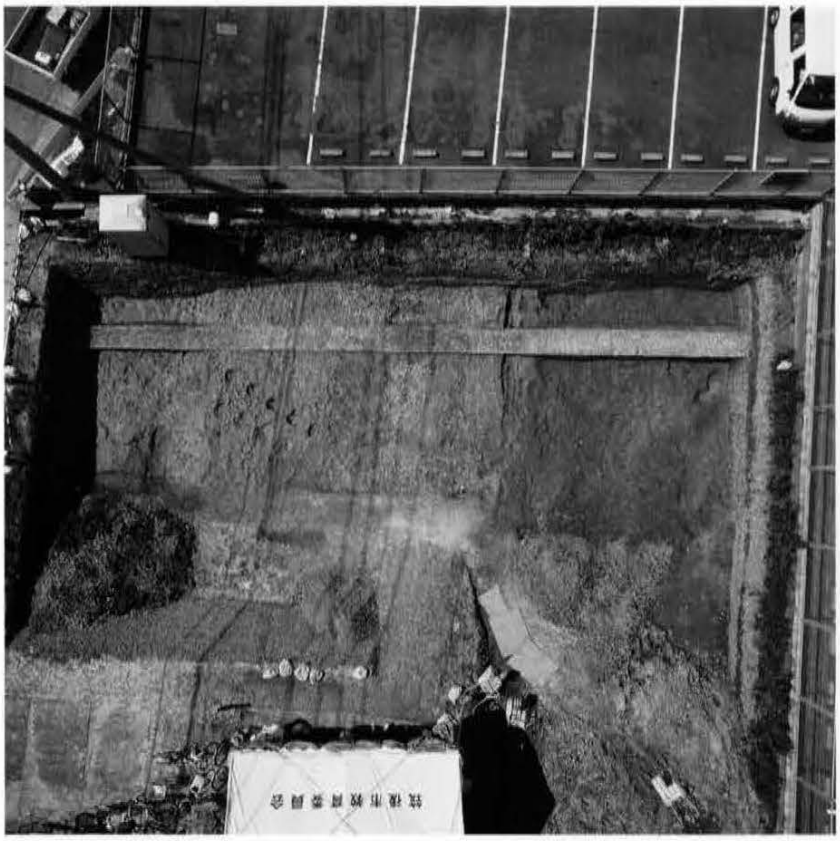


Fig.17　遺構全体図（1/60）

写真図版

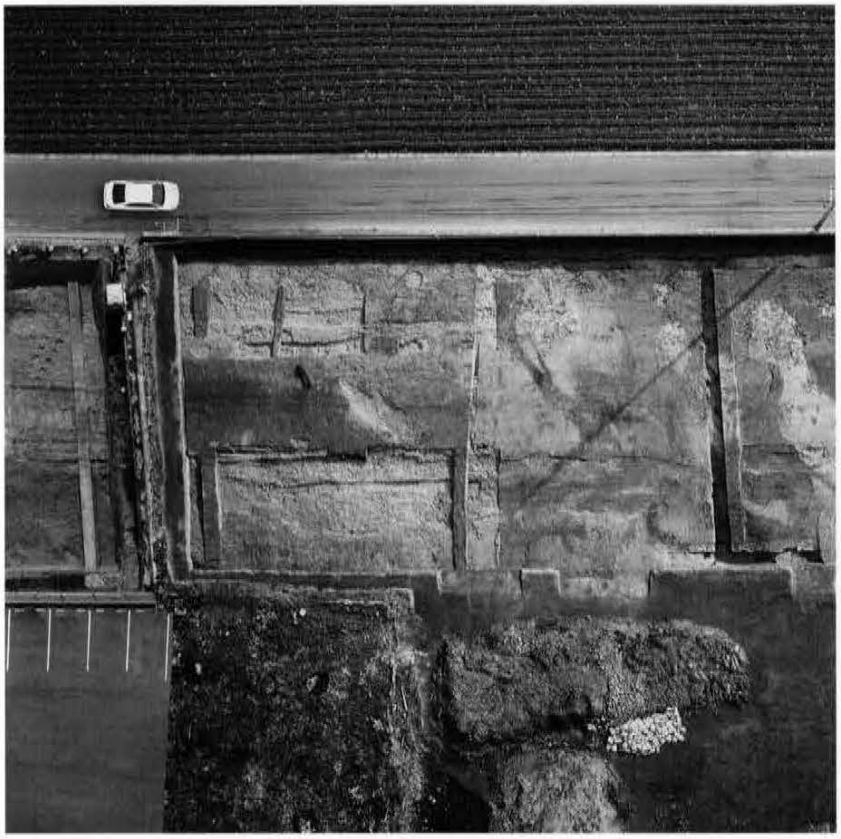
北側調査区全景（真上から）



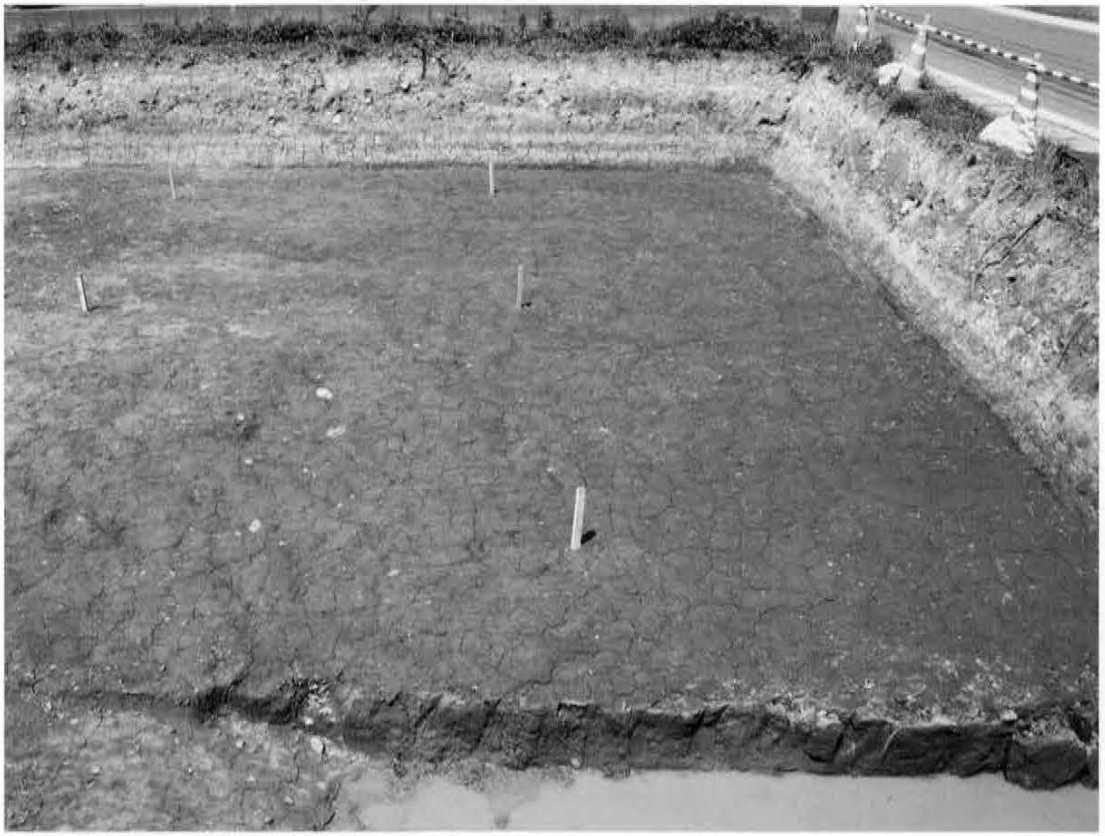
南側調査区全景（真上から）

Pla.2

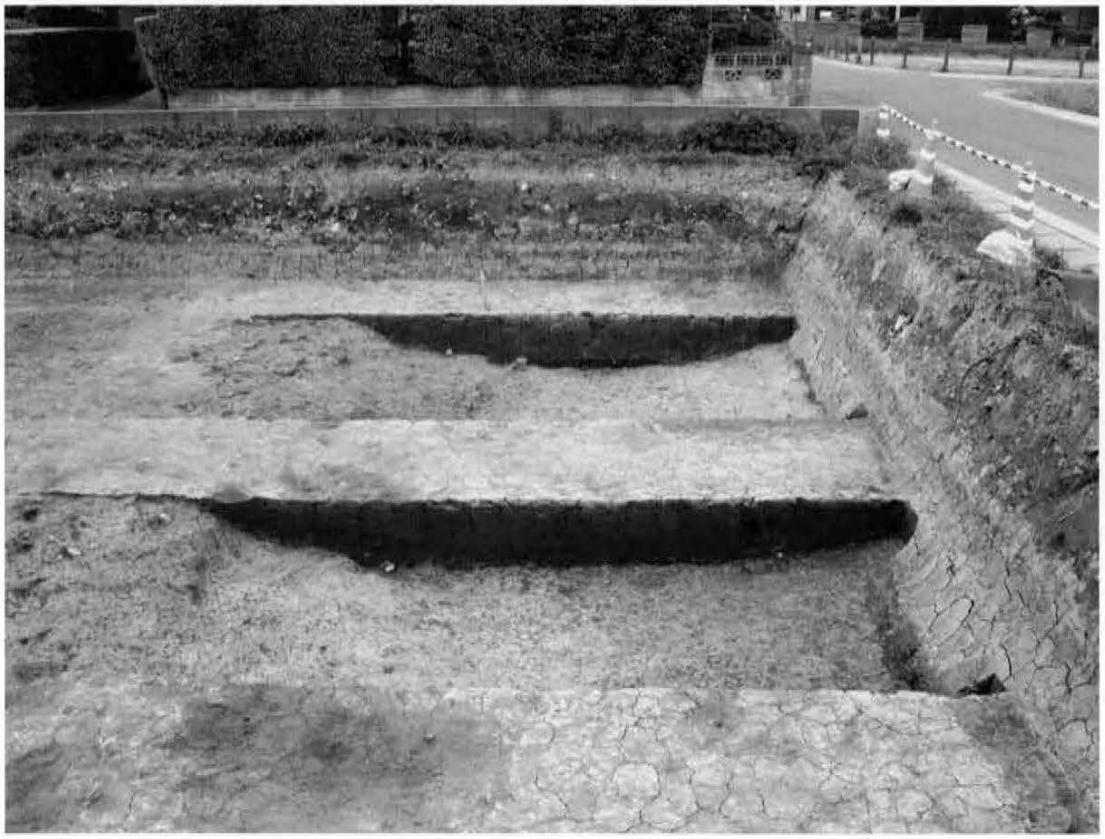
南北調査区合成写真（真上から）



山ノ井川口遺跡第１・２次合成写真（真上から）



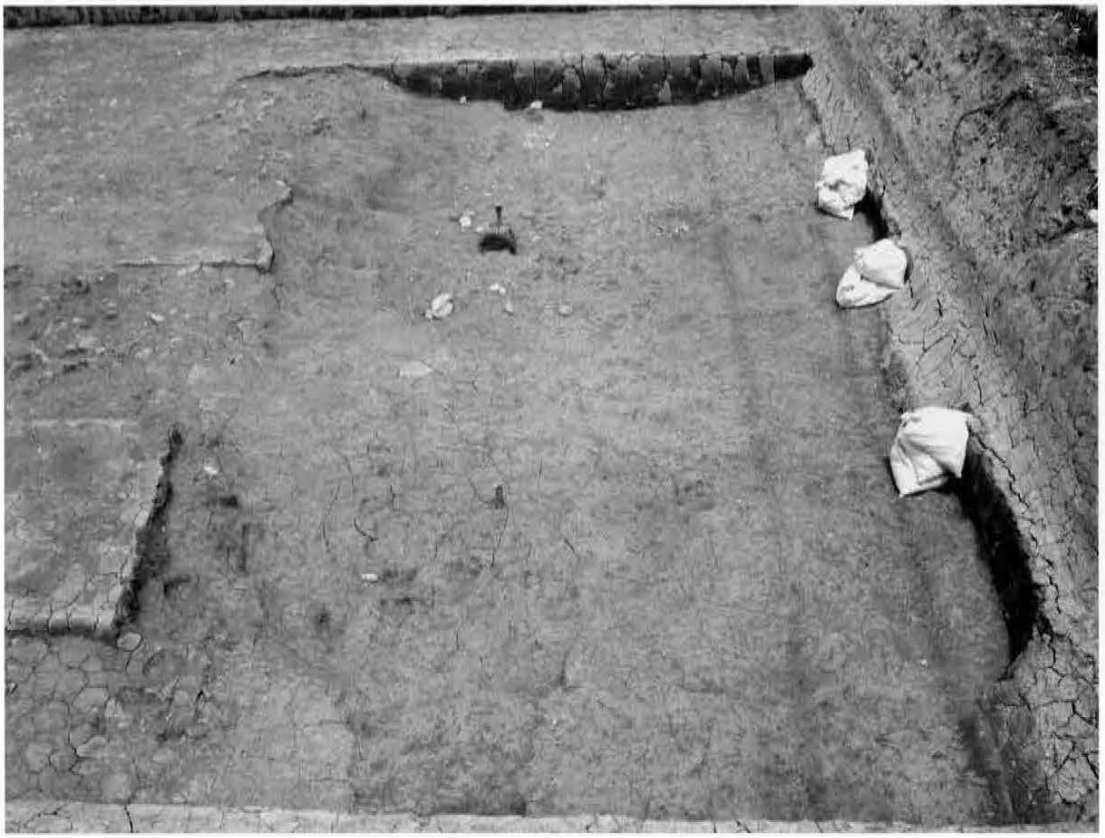
北側調査区東側溝部分検出（南から）



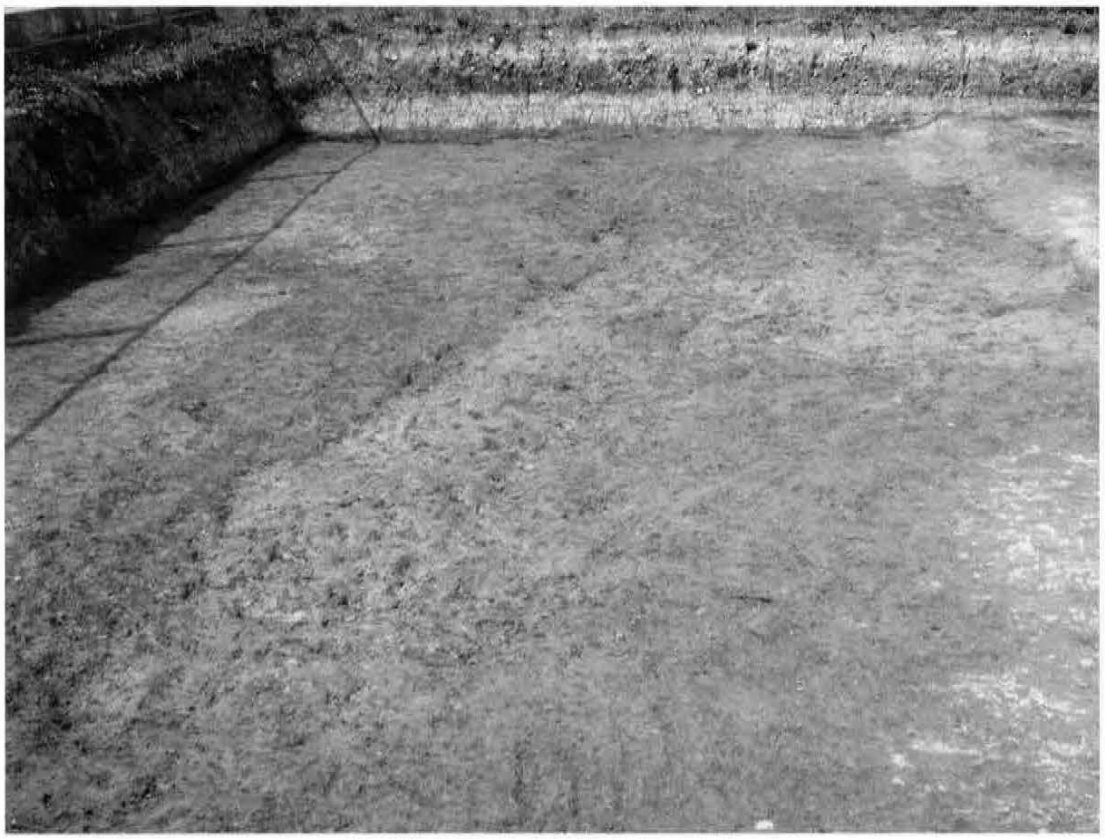
北側調査区ＳＤ01 土層観察（南から）

Pla.4

北側調査区ＳＤ01 土層観察（北から）



北側調査区ＳＤ01 完掘（南から）

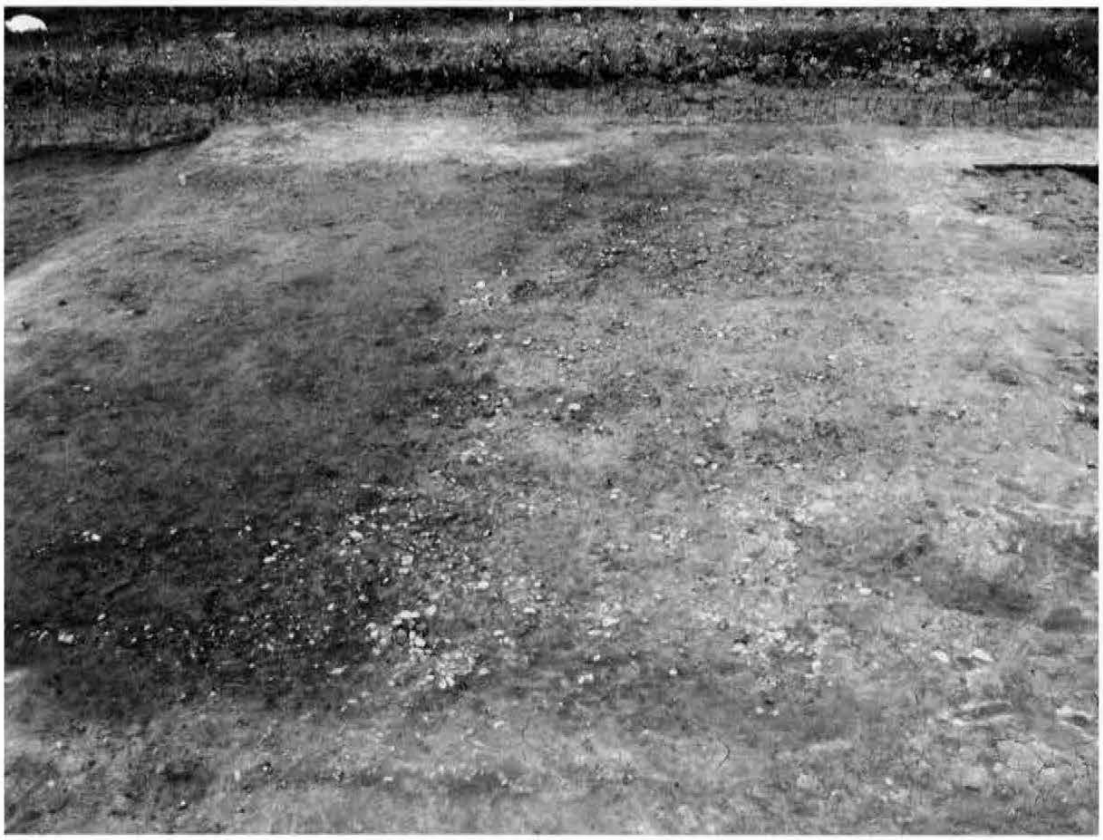


北側調査区西側溝部分検出（南から）

北側調査区ＳＤ05及び路面部第３段階完掘（南から）

Pla.6

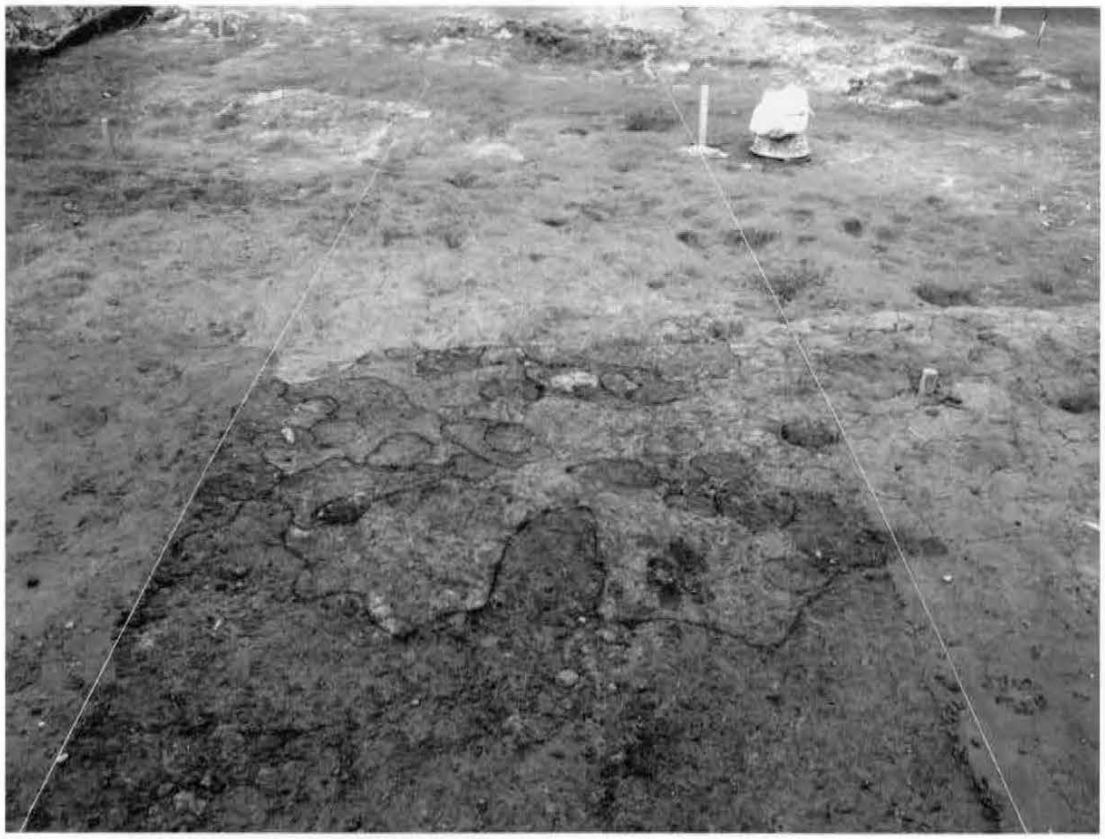
北側調査区路面部第３段階検出（南西から）



北側調査区路面部第２段階検出（南から）

北側調査区路面部第２段階掘削後第１段階検出（南から）

北側調査区路面部第１段階完掘（南から）



北側調査区路面部第１段階検出（東から）

北側調査区路面部第１段階検出（西から）

北側調査区北壁土層観察（南西から）

北側調査区北壁　西側溝部分土層（南から）

Pla.10

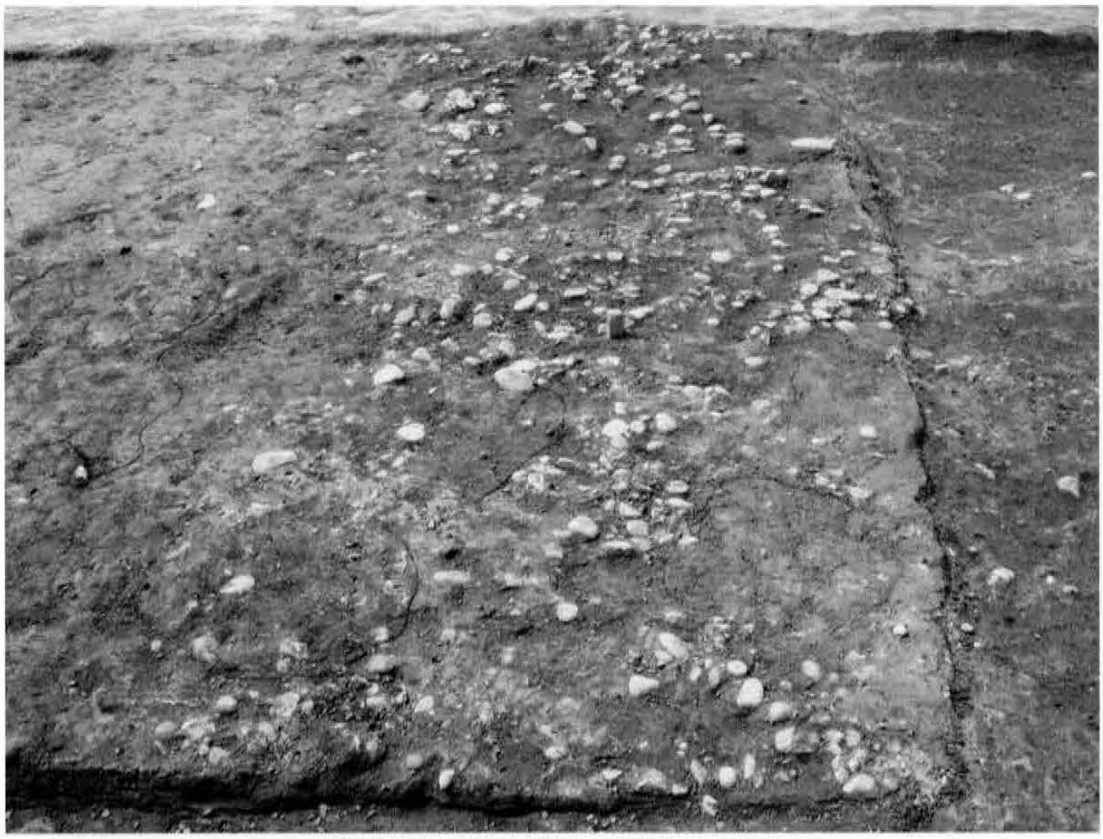
南側調査区検出（東から）

南側調査区検出（北東から）

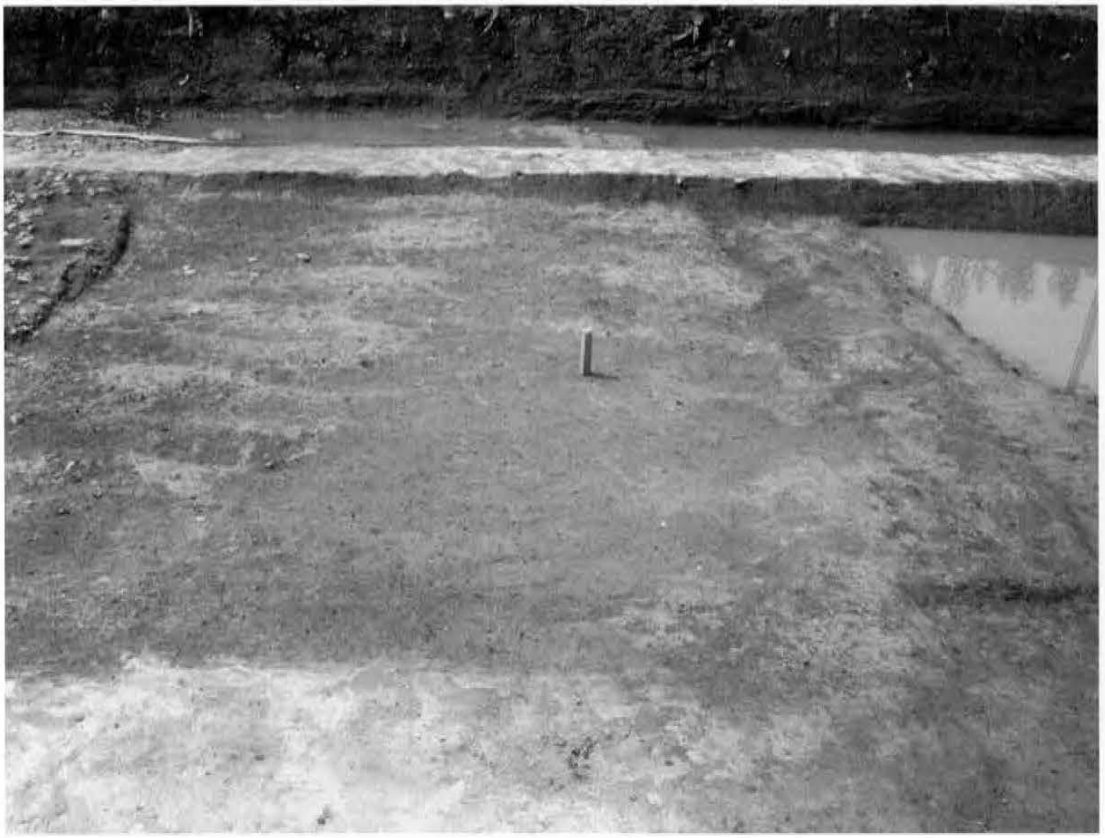
南側調査区ＳＤ01完掘（北から）

南側調査区ＳＤ05他完掘（北から）

Pla.12



南側調査区路面部第２段階検出（北から）

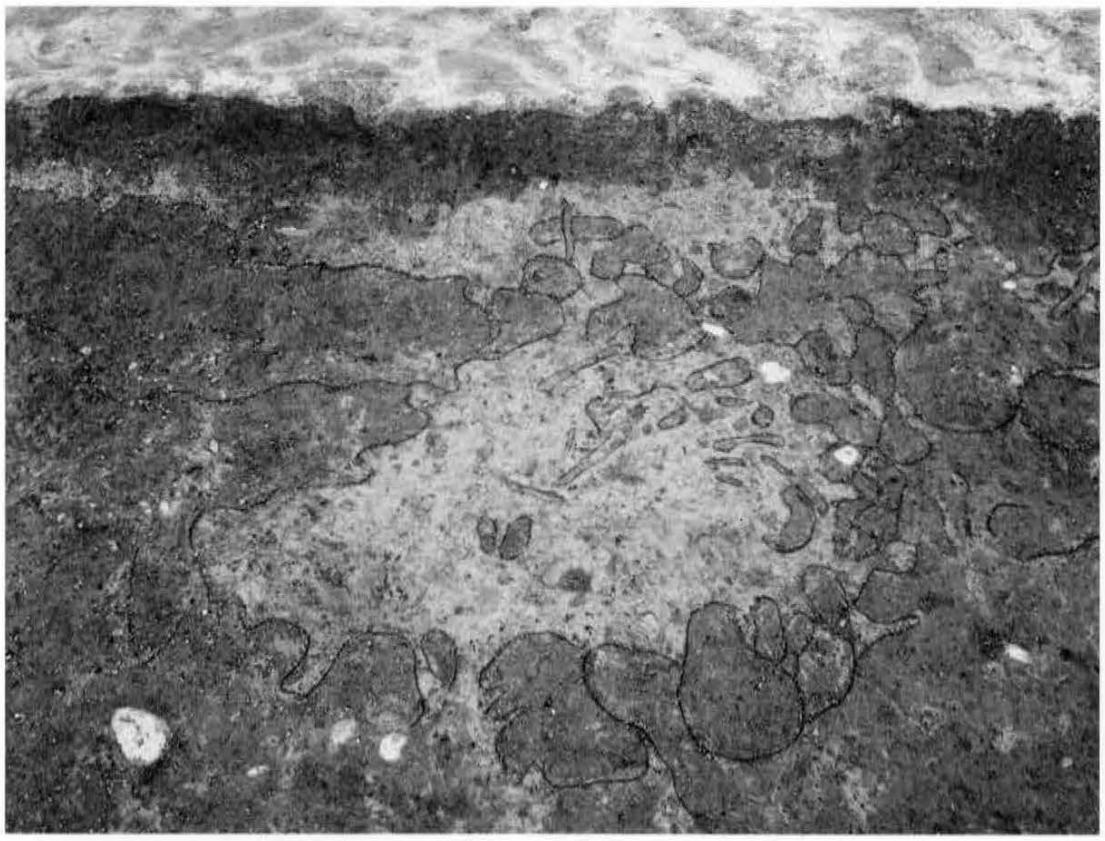


南側調査区路面部第１段階検出（北から）

南側調査区路面部第１段階検出２（北から）

南側調査区路面部第１段階西側溝路肩検出（北から）

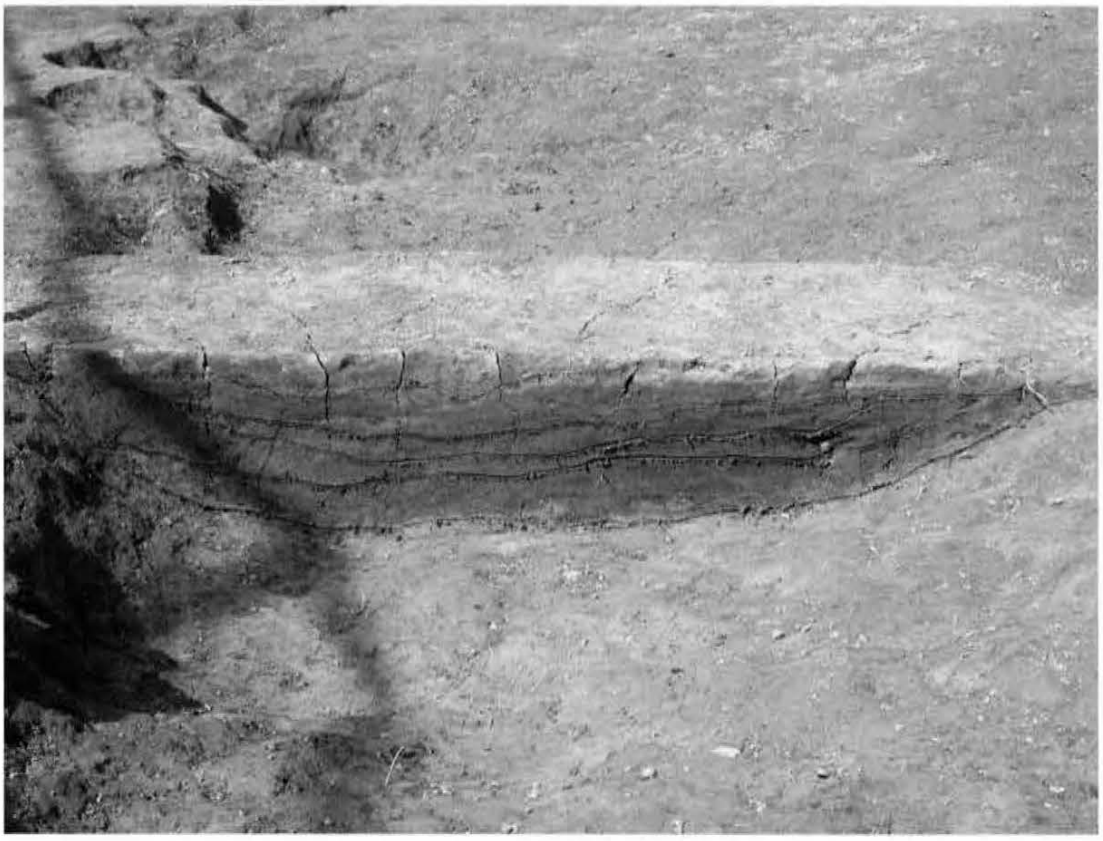
Pla.14



南側調査区路面部第１段階波板及び刺突痕検出（北から）

南側調査区路面部第１段階波板状連続土壙検出（北から）

南側調査区路面部第１段階完掘（北から）



ＳＸ02 土層観察（南から）

ＳＸ 17 完掘（南東から）

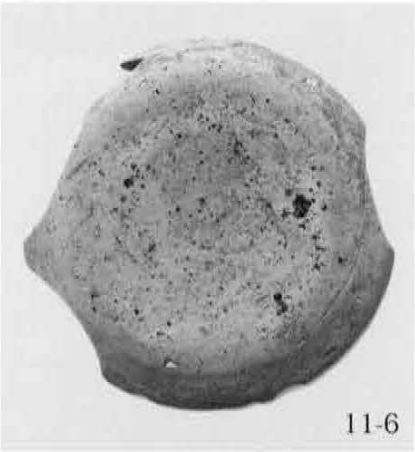
ＳＸ 23 検出（北西から）

ＳＸ23完掘（北西から）

南側調査区南壁　西側溝部分土層観察（北西から）

Pla.18

11-1


11-6

11-10

11-3

11-7

11-11

11-5

11-8

11-14

11-6

11-9

11-16

11-17

11-22

11-27

11-18

11-24

11-29

11-20

11-25

11-30

11-21

11-26

11-31

Pla.20

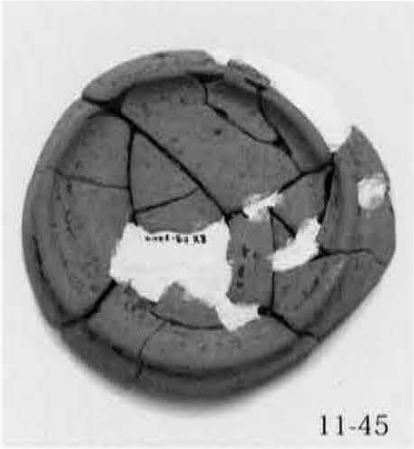
11-32

11-39

11-44

11-33

11-41


11-45

11-34

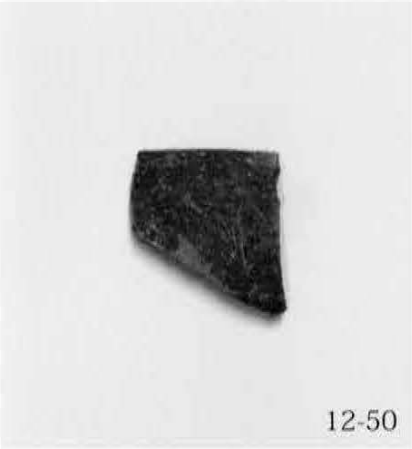
11-42

12-48

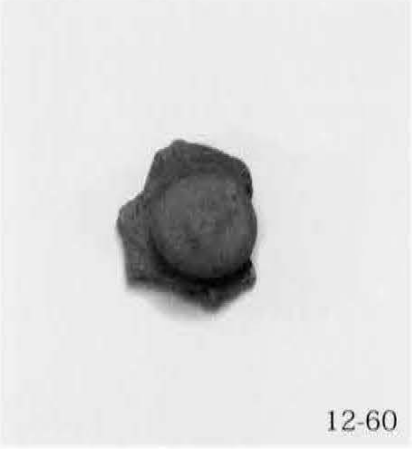
11-35

11-43

12-49


12-50

12-55


12-60

12-52

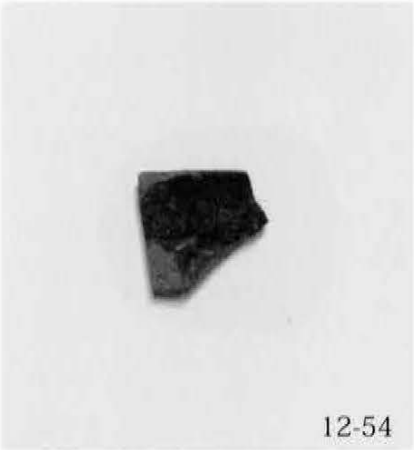
12-56

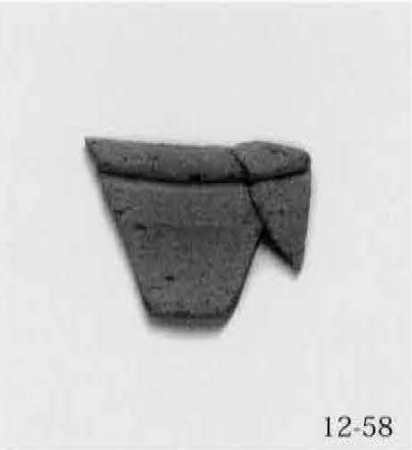
12-61

12-53

12-57

12-62


12-54


12-58

12-63

Pla.22

12-64

12-70

12-76

12-65

12-71

12-77

12-66

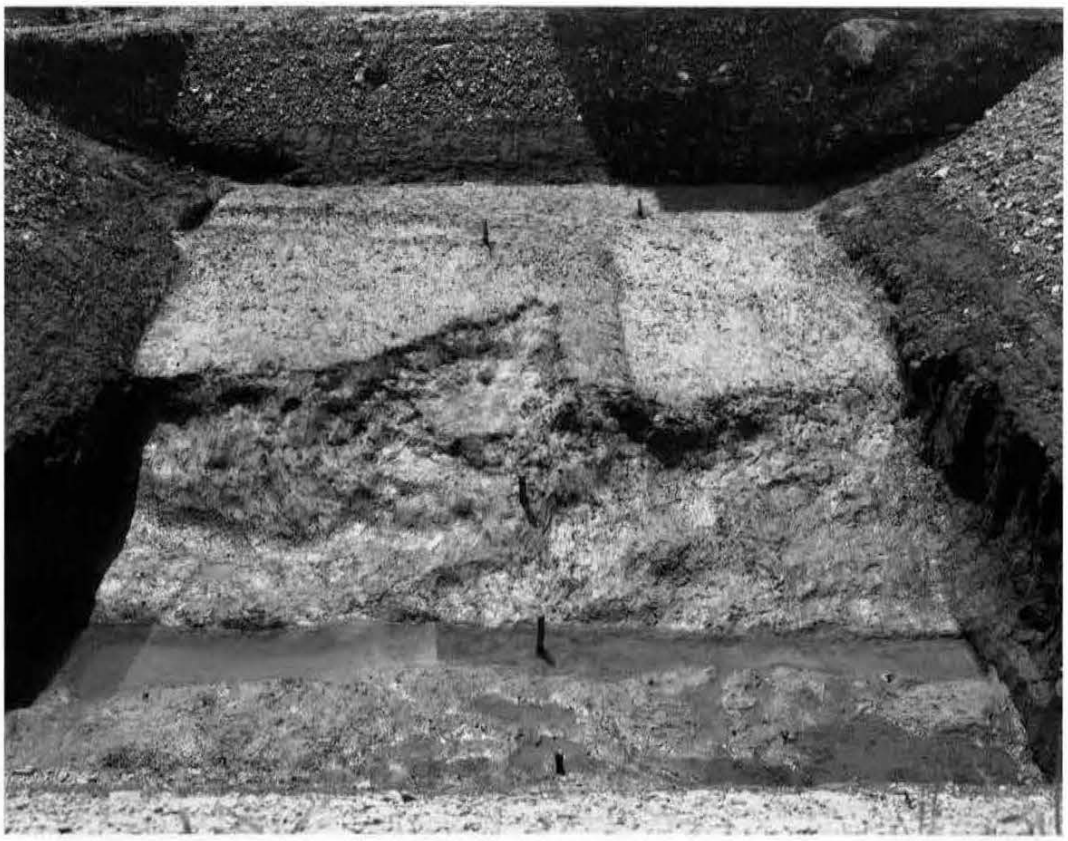
12-72

12-78

12-69

12-75

12-80



調査区全景（東から）

6SD1 南壁土層観察（北から）

6SD1 完掘状況（北から）

6SD1 出土遺物

筑後市文化財調査報告書　第85集

筑後市内遺跡群XI

平成20年3月31日

発行　筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

TEL　0942-53-4111

印刷　大道印刷株式会社

福岡県春日市日の出町6丁目23番地

TEL　092-582-0927